小悪魔えくそしすた！

まーながるむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小悪魔えくそしすた！

【Ｎコード】
Ｎ９９１６Ｕ

【作者名】
まーながるむ

【あらすじ】
超絶シスコンの兄が妹をネコ可愛がり。
道でであった美少女悪魔に求婚されて。
生徒会の後輩にはデフォでビビられる。
たまーにほんのちょっと真面目に戦ったりするかもしれないお話。
もちろん妹は実妹で。
悪魔は決まってノーパン、ノーブラ。
後輩は鞄を盾にこっちをチラチラ。

シスコン兄のあしたも地獄だ！

第一話（前書き）

予想以上に変態臭のする作品になってました。

第一話

さて、まずは自己紹介をしよう。
とは言っても話すことはそれほどないから……まぁ俺の家族のことか。
母親の名前は花氏千枝（はなうじちえ）。職業は祓魔師（エクソシスト）とかいう世間様的には占い師レベルに胡散臭いものだが……まぁ、わかりやすく言うと結局はただのバカ母だ。
父親はちょっと高給取りのサラリーマンで転勤中……結構、遠いところにな。
二人は大恋愛の末、周囲の反対を押しきって駆け落ち同然で結婚した……まぁ、反対してたのは母親側で、逆に父親側はよくやった！　みたいな空気だったらしいが。
それでも結婚二十数年目ともなると長期の転勤は単身赴任が当たり前になっているあたり夫婦間の愛情が冷めていく様子を見ているようでなんとも物悲しい。
そんな両親のおかげで一つ下の学年の妹も恋に恋する乙女な時期を三ヶ月で終わらせた。

そう、妹だ。

超可愛い、その一言に尽きる。いや、むしろ尽きない。褒めるだけで原稿用紙三百枚とか余裕だ。妹じゃなくてマイエンジェルでもいい。いや、やっぱり妹がいい。
とにかく一緒に入浴していた頃も、おにぃたまーと俺にベッタリだった時も、ある事情から少し離れて暮らしていた間も、世間の兄妹のあり方を知って兄離れに挑戦しようとしていた時期も、その甲斐あってちょっと険悪な兄妹の演技が出来るようになった今も、全部全部、ちょーかわいい！

ただ最近は普通に嫌われてるんじゃないかって一瞬だけ不安に思ってしまうくらい本格的に演じてる。
周りに誰もいないときは素直に甘えていいんだよ、というか甘えてほしい……そう言ったら顔を真っ赤にして照れ隠しに殴られてしまった。
……うーん、本当に可愛いよなぁ。
そんな妹の名前は未咲（みさき）、今まさに花咲かんとしている歳の割に精神面で幼い妹をよく表していると思う。あんなんじゃ心配すぎて一生お嫁にあげられないな。もちろんあげる気なんてさらさら無いが。
そんなちょーかわいいマジ天使なマイシスターは勤勉で努力家だ。
学問だろうがなんだろうが苦手なものをとことん克服していく。そのための努力を厭わない未咲の姿を見てしまった世界中の男が惚れちゃうのも仕方が無い。
ただ、悪く言えば器用貧乏だけど……そんな万能ではないところがまた可愛らしいと思う。
もちろん仮に妹が天才で万能だったとしてもその可愛さに変わりはない。
そんな我が愛しの妹だが残念ながら祓魔師の才能はない。それも祓魔師の娘の割に、ということではなくて普通に無い。
俺も未咲も母親が有名な祓魔師である以上、将来的に祓魔師になるべく修行をしているのだが……あぁ、俺の方は流石私の息子ね、と母親に言われる程度には才能がある。
だから俺はもう最下級とはいえ公的に祓魔師を名乗れるが妹はまだ祓魔師見習いだし、これからもきっとそうだろう。
俺以上に祓魔師に憧れていたのにな……変われるものなら変わってあげたいが、そういうことを言うと切れ長の目に涙を溜めながら怒るから下手なことは言えない。プライドの高い困った子猫ちゃんな妹だ。
さて、そんな超可愛い妹を持つ、世界一幸運な俺のことだが……自分のことを話すのは恥ずかしいから普段から周りに言われること

をそのまま言う。
学校の友人たちいわく、眉目秀麗、頭脳明晰、泰然自若……などなど色々な誉め言葉の冠に『微妙に』とつけると俺になるらしい。そこだけ見れば平均よりも微妙にいい人となりそうだが、ところがどっこい、悪鬼羅刹、極悪非道、冷酷無比という貶し言葉に『ちょっぴり』とつけるだけでもいいらしい。
つまるところ平均して凡人だと思うんだが……
まぁ、先にも言ったように祓魔師ではあるが、それと同時に大学受験を一年後に控えた高校生でもある。俺の通っている高校は大学までエスカレーター式だから特に心配することはないが……勉強？
何それ美味しいの？
と、そんな感じで日々をその日暮らしで生きている俺だけど学校での立場は割と堅実だ。適当に好き勝手すごしていたらいつのまにか生徒会長職についていた。
……とはいえ俺の学校は学校内に普通科や工業科など様々な学科があるため、俺はその中の第一普通科生徒会長ということになっているが。権力が分散して面倒なことも多いが全校生徒数が四桁を越すマンモス校だから仕方ないと言えば仕方ない。四桁の生徒からの要望やらなにやらを一人で解決するのはさすがに無理だ。
その四桁人数を纏めるための立場にいるのは俺を含めて八人ずついる生徒会長と同数の風紀委員長、そして四人の部活組合長だ。その中にも序列はあるものの、そもそも雑務をこなすだけの仕事だから序列なんてあってないようなものだ。
ちなみに妹は第一普通科風紀委員副長という立場をもって俺をビシバシと指導している。
ビバ愛の鞭。
そして俺たちの暮らす街だが……なんというか、悪魔や妖怪という人外に類するものが多い。
なぜかは知らないが……その関係で俺たちの様な魔祓いを生業としている家系がいくつかあるのは確かだ。

俺の家系の専門は基本的に対悪魔のアレコレ。しかし、悪魔たちは見た目は人間なので一般人と混じって普通に暮らしているため、祓魔師としての仕事を完遂するためにはその見分け方くらいは知っている必要がある。
そして、こう見えて俺もなかなかの才能の持ち主だ。悪魔を見分ける程度のことが出来ない理由が無い
俺たちが押さえておくべき悪魔の特徴とは……

「坊や、お姉さんとお茶してかない？」

一つは美男美女であるかモザイク処理をかけたくなる不細工であること。

「お茶じゃなくて、イイコトでもいいよ？」

一つは美人であればものすごい馴れ馴れしい、もといフレンドリーであり、ブサイクであれば相当腰が低いこと。
そして……

「あんた、何者だ？」
「え～？　完璧に人間になってるはずなんだけど……どっからどう見たって人間だよね？　え、なにかおかしい？」
「まぁ、まず第一に人間はそういうこと言わないな」

どこか少し間が抜けていて、

「というか、残念ながら普通の人間は……」
「人間は……？」
「下着をちゃんとはいている」
「……えっと……その……見たの？」

……開放的な性格のためかパンツをはかない。
なんでもはいていると気が滅入るらしい。
事実、悪魔、またはそれに類するものでパンツをはいている存在を俺は二人しか知らない。
そして何より面倒なのが、

「……えっち」

はいていないからといって羞恥心が無いわけではないことだ。
こうなると、俺も頬を赤らめる暫定悪魔の処断に困ってしまうわけである。
最初にも言ったように悪魔、特に女性のものは八割ほどが美人、もしくは美少女なのだ。

■□■

「花氏胤（たね）。祓魔師だ」
「ありゃりゃ、タネ君ってエクソシストだったんだ……そりゃーバレちゃうわけだ」
「……ま、まぁな」

発見した悪魔を連れてファミレスで一服する。
男の祓魔師は悪魔を見分ける能力が弱いなんてことは……知ってるだろうし改めて言わなくてもいいか。
男祓魔師と女祓魔師には基本的に得意な能力に違いがある。
男性は悪魔を攻撃する能力こそ強いものの悪魔に対する抵抗力や悪魔を見分ける力は弱い。精々が自称・霊感の強い人程度だ。
逆に女性は攻撃手段こそ限られているがその他のことに強い。凄腕の女祓魔師ともなると半径一キロ以内の悪魔の行動をもれなく監

視できるらしい。
　そこで重要なのが各国の伝承にあるような銀の弾丸や杭など、悪魔に対して強い効果を示す武器も数多く存在するため、それらを使えば攻撃手段の強弱なんてあってないようなものということだ……そういう事情もあって男性より女性の祓魔師の方が重宝されている。そもそも今の時代、祓魔師に戦うことはあまり求められないからな。
　そして、もちろん能力が違えば特訓の方法も異なる。女性の方は知らないが、男性の特訓は単純だ。
　最初にマスターする技能はたった二つ。さりげなく相手に触ることと相手に違和感を感じさせずにスカートをめくることだ。
　……いや、本当に。
　というのも感知力が弱いために、直接相手に触ってようやく「こいつ悪魔かも……？」と思える程度。その時点で相手がパンツルックだったら一般人だが、スカートを着用していたら下着を身に付けているかを確認、着用していたら一般人だ。
　下着が普及し、はくことが当たり前となった現代社会ではその下着の有無は悪魔を見定める上でもっとも有効な手段となっている。
　すっげー情けない、とか言わないでほしい。

「で、でもさ……男の子だからって、その、女の子のスカートはめくっちゃダメなんだからね？　タネ君、めっ！　だよ？」

　顔を赤らめながらも年上のお姉さんというキャラを意識しているのか、わざとらしく人差し指を立てて注意してくる。
　本人は妖艶なお姉さんを演出したいのかもしれないが……外見は精々少し大人びた高校生レベルだ。それも幼さを感じさせる言動のせいでほとんど中和……というより幼く感じる。
　初対面なのにもかかわらずタネ君などと呼ぶなんて馴れ馴れしいことこの上ないが、これが悪魔というもの。
　古来より気紛れで人間を手伝ったり、夫婦になってみたり、はた

また死産してしまった赤ん坊に乗り移って息子になってみたり、彼らは基本的に人間が好きなのだ。
たまーに悪い奴等がいるが、それも人間と遊びたい！　という子供らしい感情の発露らしい。そういった連中を俺達祓魔師がシバいて矯正している。
……稀にぶっ飛んだやつが現れることもあるがそんなのは地球規模で見て一年に数十件程度。一人の祓魔師がそんなやつに会う確立なんて一生に一度あるかないか位だ。

「待て。俺が無差別にスカートをめくって楽しむ変態みたいな言い方はやめてくれ」
「えっ？」

少しあどけなさが残る反応で、その顔を本心から意外という形に変えた。
別に男性の祓魔師を代表する気はないが、少なくとも俺は好き好んでめくっているわけではない。

「なら、役得？」
「そうだな……って違う！」
「じゃ、じゃあ、まさかタネ君は男専門なの……？」

グラスの水を使って手の中に氷の薔薇を生み出して「こういう趣味？」と聞いてきた。百合に対する薔薇、という意味だろう……
なんでもいいが、想像して顔を赤らめるのはやめてほしい。

「……魔法を堂々と使うな」

頭痛くなってきたぞ……

「ごめんなさーい。それで、これなの？」

今度は薔薇を一旦溶かし、菊の花の形に凍らせてその中心に指を突き立てる。

氷結魔法か……それもかなり精密な。

魔法は悪魔の使う特殊な技能。

それを人間でも使えるように体系化したのが魔術という技術だ。祓魔術も一応は魔術の一部であり、もちろん悪魔から技術を伝えてもらうこともあるのだが……

菊の花を指で貫いたその表情は恥ずかしそうな反面、ワクワクしているようにも見える。菊が示すものは人間の特定の部位……その、形状が菊の花に似ているというかなんというか……

悪魔だろうが人間だろうが物好きはいるんだな……とにかく、この悪魔にはなにも教わりたくない。

「……少しはめくって興奮してる」

俺ももういい歳した男だし、スカートめくりを楽しむような奴と思われたくはないが……ホモだと思われる方がもっと嫌だ。

俺は、ちゃんと妹を始めとした女の子たちが好きだからな。

「少し？」

「……いや、結構」

「思春期だよね？」

「……あぁ、全力で興奮してるさ！　夜のお供にしたことだってある！　これで満足か！？　満足したな！？」

「……面と向かってオカズにするなんて言われると……困っちゃうな……ポ」

「て　れ　る　な　！」

「はぁ～い」

考えてもみろ。
めくったらはいてない、それが悪魔という生き物だ。
しかも顔を始め体は人間と同じ形をしている。無論、女性らしさというものを誇示する部分もだ。
健全な男子高校生としてはもうたまらん、というやつだ。

「あ、顔赤くなった……も、もしかして、私の思い出してる……？」
「……悪い」
「あ、ううん。別に……そうなんだ……」

気まずい！
そりゃそうだ！
俺だって自分の息子を女性に見られたあとで顔を赤くされたら反応に困る！
……ぐぬぬぬぬ。

「そ、そうだっ！」

悪魔が思い付いた、というように顔を輝かせた。
俺もこの空気を払拭できる話題なら大歓迎だ。
さぁこい。
今ならなんだって答えようじゃないか。

「そもそもなんで私が悪魔だと疑ったの？　確か男の子は見ただけじゃ分からないって聞いたことがある様な……ないような？」
「……微妙に話変わってないが、まぁいいか。理由は簡単、あんたが類稀な美少女だからだ」

何度も言うが、悪魔は美形が多い。信じられないほどの美少女は

まず悪魔かどうかを疑うべきだ。

「そ、そっか……ありがと」

「照れるな。あとは、俺は今ここら一体の管理祓魔師代行だからな。普段なら悪魔だと思っても手は出さないが……あんたは初めて見る顔だった。大方、まだ契約してないだろ？」

管理祓魔師というのは地域の人外を把握し、抑制し、また彼らの生活をサポートするための責任者だ。とは言っても祓魔師の数も限られているため管理祓魔師が存在しない区域もあるが。

本来はうちの母親が管理祓魔師なのだが現在ヨーロッパに遠征中なので俺が代理人になっている。

最近では一年のうちの半分は俺が管理している気がしないでもない。

「うん。実は先週やっと認定試験に受かって魔界から出てきたばっかで……」

魔界での制度のため認定試験については詳しくないが、人間と共に生きる許可を受けたということだ。

許可の取得に様々な条件があり、それを持っていると言うことは目の前の悪魔もエリートということらしい。

「さっきもタネ君の家に挨拶に行くところだったんだよ」

「なるほどな」

行き違いにならずにすんだのはお互いに運がよかったな。

強制ではないが、悪魔としては管理祓魔師の家で契約をすれば金銭面や就職などで融通が利く。

そして管理祓魔師としても契約した人外生物が多いほど行政から

の助成金も増える、ということだ。魔祓いの仕事など珍しいので大抵の祓魔師はこうして生計をたてている。その代わり、契約している悪魔が何か問題を起こすと祓魔師にも責任が発生してしまうのが難点といえば難点だが、そんなことはなかなか起きない。

「でもさっ、一日目から、それも路上で会えたなんて運がいいよね！　運命的っ！」

「そうか？」

目的地が俺の家な以上、そこまで確率が低いとも思わないが……

「そうだよっ……そ、それに、タネ君、私のこと可愛いって言ってくれたし……」

「……」

雲行きが、怪しい。

急激乾いた唇を湿らそうとコーラに口を付ける。

「だからタネ君！　私と結婚しよ！」

「ぶふぅ！？」

「わっ！？　きちゃない！」

「げほっ！　ごほっ、おま、いきなり、ごほっごほっ！」

よりによって結婚！？

そうぞうの遥か上をいくぶっ飛び方だなおい！？

そりゃ、国に認めてもらいさえすれば人間と悪魔の結婚も可能だけど……奔放な悪魔から求婚されるなんて初耳だ。

前人未踏の状況に俺はいるのではないだろうか……いや、前例はあるのだから前人未踏ではないんだが。

「ごめーんね？　でも、そんなに驚くとは思わなくて……」
「わざとだったらみだりに人心を惑わせた罪で魔界に蹴り返せたんだがな……」

俺が噴き出してしまったコーラを魔法で凍らせて払い落としながら悪魔が軽く謝ってきた。

「うぅ、気を付けます……でもね？　私、人間界で人間と結婚するのがずっと夢だったの！　魔界には結婚なんていう習慣もないし、祝ってくれる友達も少ないからさ」
「……なら、結婚の前に祝ってくれる友人を増やせ」

なんともまぁ、変わった悪魔もいるものだ。
つまりは将来の夢がお嫁さんだということだ。人間ならそれが許されるのは小学生くらいまでだろうに。
そんな幼気（いたいけ）な夢を恥ずかしそうに笑いながら話す悪魔なんて有史以来初めてなんじゃないか？

「あーそだね！　やっぱり祝ってくれるのがタネ君の友達だけじゃ私も寂しいし……」
「いや、俺を巻き込むなよ」
「でも、タネ君、私のこと可愛いって言ってくれたし、タネ君も可愛いから私好みだし……」
「可愛い言うな」
「でもホントだよ？」

……世の中には真実だからこそ言われたくないってこともあるんだ。
これまで俺が女顔だったためにどれだけ苦労してきたことか……
悪魔は根が正直すぎて困る。

「まぁ、でも学校は魔界で決めてきたから友達もすぐできるよ！
住む家も決まったし！」
「学校？　家？」

そういうものは普通は管理祓魔師がサポートするものだが……また、果てしなく嫌な予感がするぞ。

「うん！　明日から城南高校第一普通科の生徒になるんだ！　学年は二年生！　クラスは六組！」

おーまいがっ！
よりによって同じ高校の同じ学年、しかも同じクラスだと？
なんの冗談だ……

「同じ教室なの！？　タネ君の名字は花氏だよね……なら、もしかしたら席も近いかもね」

きゃっきゃと笑う悪魔。
そういえばまだ名前も聞いてなかったな。

「私の名前？　んと、人間の発音だと……ウェルミ・トーリアス・フクティオニス・ハナ。学校にはウェルミ・ハナで登録したからやっぱり席は近いかも！」

残念ながらうちの学校は名前順で席を配置していないため名字が似通っていても席が近くとは限らない。
しかも何かの拍子に席が名前順になったとしてもハナと花氏の間には花井（はない）さんに花上（はあうえ）さんがいたはずだ。
まぁ、本当に残念ながら……俺の隣の席は空席なんだが……

「そんなことよりミドルネーム持ちで称号持ちと来たか……」
魔界でミドルネームを持っているのは王侯貴族だけだったはず……
「それにフクティオニスって……確か魔界だと永久凍土って意味だよな？」
「そだよ？」
「氷結魔法の第二級称号じゃねぇか……」
魔界の格付けで特級、第一級と次いで三番目だ。
簡単に言ってしまえば、魔界で三番目に強力な氷結魔法の使い手だということ。
そんな伝説級の大悪魔にも近い存在には思えないが……なんで人間界に……
「謎だ……」
「だから！　結婚したいの！　タネ君と！」
だから、なんで巻き込むんだって！
というか俺と結婚することじゃなくて人間と結婚することが夢って言ってたじゃないか！
「今はもうタネ君がいいのっ！　でも、そこまで言うなら……じゃあ、いいよ……」
「そうそう、他の相手でも、」
急にしおらしくなったことに若干の戸惑いを覚えながらも、この機を逃したらいけないとたたみかけることにする。
否、しようとした。

「私の恥ずかしいところ見た責任取ってって今ここで叫ぶから！」
「……ちょっと待て、落ち着け、いいな？」
「……後ろの穴も前の穴も、余すとこなく全部、穴が空くほど見られたって、」
「よし、ラマーズ法だ。ひっ、ひっ、ふぅー。ひっ、ひっ、ふぅー」

って、俺がやってどうする！
というか後ろの穴は見てないぞ！
それに穴が空くほどってすでに空いてるじゃねぇか！

「えと……まずはタネ君が落ち着くべきだと思うの……」
「誰が慌てさせてると思ってる……まぁ、それは置いといて。家は？」

俺は知っている。
偉い人も言っていた。
曰く、

「タネ君のおうちだよ？　結婚するんだもん。当然でしょ？」

二度あることは、三度ある。
あぁ、未咲になんて説明しよう……

第二話（前書き）

実妹登場。
なんか長ーくなってたわ

第二話

「へー……ここがタネ君の家？」
「でかいだろ？」

青みがかった銀色の髪を翻しながら振り返ったウェルミが尋ねてくる。西日をキラキラと反射する銀髪が綺麗だと感じたが口に出すのは恥ずかしいし調子に乗りそうな気がしたので何も言わないことにした。
これでも母親は結構有名な祓魔師だからな。世界各地から依頼が飛んでくる関係で収入もなかなかだ。
そのお陰で俺達もこれだけ立派な家に住めている。

「んー？　お城じゃないんだね」
「……ここは日本だからな」

もちろん、日本でなくとも家が城だなんてやつは早々いないだろうが……そういえば、こいつの実家は貴族か。
貴族に対して家自慢って、何て恥ずかしいことをしたんだ。

「ま、入りな」
「え、あ、いや……その、タネ君が先に入ってくれないと」
「……ん？　あぁ、すまん。気がつかなかった」
「面倒でごめんねぇ」

悪魔は家主が内側から扉を開いて招かない限り他人の家には入れない。例外は、家の持ち主と何らかの契約を交わしているときか、扉が開きっぱなしで家主が見ていないときだけだ。
とにかく俺が家に入って扉を閉め、もう一度扉を開けて招かない

といけない。

「タネ君」

「ん？」

「信じてるからね！　このまま私を中に入れないなんてこと、しないよね？」

く……先手を打たれた……

「しないしない」

いやまぁ、俺はいいんだよ。悪魔と同居したって。

ただ、未咲がなぁ……あいつ、悪魔のこと苦手っていうか遠ざけようとしがちだし。

学校の風紀委員の仕事でまだ帰ってきてないから今はいいとして……

「ほら、入れ。誰もいないけど騒ぐなよ？」

「二人きりなの！？　お、おおお、お邪魔しましゅっ！　します！」

……？

なに緊張してるんだ？

「お、おい、ウェルミ？　右手と右足が同時に出てるぞ？」

ナンバ走りでもマスターする気かよ。

「な、にゃ、なまえ呼び……」

自分も俺の名前呼んでるだろうに……なんだ、どうしたんだコイ

ッ？
まぁ、とりあえず管理者代行として契約書とその説明のための書類持ってこないとな。
確かお袋が遠征に言ったときに未咲が書類を俺の部屋の机の引き出しに入れといた、とか言ってたはずだ。
気が利く妹を持てて俺は幸運だな。
ウェルミに声は……かけなくていいか。なんか空見て溜め息ついてるし。

「なにしてんだろうな？」

とりあえず二階の俺の部屋に行こう。
未咲の部屋の前を通りすぎて一部屋挟んだ端の部屋。そこが俺の部屋だ。
間の部屋は空き部屋。
無駄にデカい家だから空き部屋が三個もあるんだよな。
ちなみに可愛い未咲と俺の部屋の間に一部屋挟まっているのは俺から未咲へ対する気遣いだ。未咲だって女の子だから恥ずかしい声が出てしまうような行為をすることもあるだろうという兄としての処世術。
これを言ったら殺されかけた上、そういうことは気にしないでいいなんて言われてしまったが。

「えーと、書類は……っと、これか？」

明らかに俺の趣味ではない、子猫をさらにデフォルメしたような絵が描かれたクリアファイルを取り出す。
未咲としては書類が汚れないようにという配慮なのだろうが……正直、男子高校生の机にこんな可愛いものが入ってるってどうよ？

「かーわいー！　ねこちゃんだー♪」
「妹のだけど……って、なんでいる？」
……いつの間にかウェルミが部屋に来ていた。
いまは俺の背中に飛び付くみたいに絡み付いて俺の肩越しに猫ファイルを見ている。
目がキラッキラしてんぞ……
というか暑苦しいから離れ……

ふにょん

「む……」

背中で形を変えるこの柔らかさは……ノーブラか。
まぁ、下もはいてないんだから上をつけていないのも当然といえば当然……って違う！

「くっつくな。当たってる……」
「えっと……あててんのよ？」

定型句……！
というか魔界から出てきたばかりなのにどうしてそんなピンポイントな知識を持ってるんだ。
って抱きつく力を強めるな！

「ウェルミ、離れ、」
「やーだ。んふ♪」

後ろから回された人差し指で唇を抑えられた。
そしてその自分の指をチロチロと舐めだす……間接ディープキス？

いかん、ドキドキしてきた。
正直にいえば胸が背中に押し付けられている時点でドキドキしてた！

「んー……かぷ♪」
「うひぃ！？」

耳を甘噛みするなぁっ！？
変な声出たじゃないか……まったく、悪魔ってやつはこういうところが、

「ぺろ♪」
「ひゃん！」

って、舐めるのも、

「胤くん……このまま、き、キス、しちゃおっか？」
「は？」

がしゃんと家の門扉を閉じる音がしたなー、と思ったが、そんな思考はすぐに隅に追いやられ、俺はただウェルミの柔らかそうな唇を見ていた。
ウェルミが舌で自分の唇をペロリと舐めあげるとリップもつけていないその唇が蠱惑的に光を反射する。
俺は思考能力を奪われてしまったかのように。ただただウェルミの怪しい微笑みだけを見るしかなかった。

「タネ君、きて」

俺は呆然としたままウェルミに手を引かれ、ベッドに倒れ込んだ。

ウェルミはその下敷きになっている。傍から見れば俺が押し倒しているように見えるだろう。
俺の手はいつの間にかウェルミの胸を掴み、ウェルミはそれを振り払わずに両腕を俺の首に回した。

「好きにしていいんだよ……♪」

ごくり、と生唾を飲み込んだ音がやけに大きく聞こえた。
ウェルミもウェルミでやはり主導権を握っていても恥ずかしいのか首から頬にかけて全体的に淡く朱が差している。
それでも妖艶な女を感じさせる顔になっているウェルミを見て心臓が暴れだすのを自覚する。
別に……悪魔と人間が結ばれても問題はない。
前例も、ある。

「んはぁ……タネ君、優しいね」

右手でウェルミの豊満な胸を撫でながら、そろそろと互いに顔を近づけていく。
途中、敏感なところに俺の指が引っ掛かったのか、ウェルミは一瞬だけ体を硬直させた。

がちゃ

「なんだ、兄さん、いるなら返事してくださ、」
「未咲……？」

おかえり。早かったな。

……っは！？

俺は一体何を！？
いくらウェルミが美少女で好意を示してきたからって手を出すのが早すぎだろ！
というか俺には未咲という妹がだな……って未咲！？

「……兄様、気分はどうですか？」
「え？　ああ、悪くない」

……うん、やっぱり未咲はいい子だ。
こんな、端から見たら『家に帰ったら自分の兄が彼女を連れ込んで、まさに行為を始めるところだった』なんていう気まずい場面を見てしまったのに、俺の体調を気遣ってくれる。ただ、どうしてこの場面で体調を気にするのかはよくわからないが。

「まぁ、そうですよね」
「あれ？」

やっぱり、怒ってる？

「私がわざわざ暑い中、学校に行って仕事をしていたのに兄様は部屋で女性とせ……せっ、セック……」

その一単語だけ言えないまま未咲が首筋から赤くなっていく。

「ん～？　……俺が、女性となにかなぁ……？」

うわぁ、照れる未咲可愛い！
超可愛い！
ウェルミの両腕がいまだに俺の首に回されていなければすぐにでも抱きしめて頭を撫でて……？

むにょん

「ぁん」

俺の右手もまだウェルミの胸の上……だと？

「タネく、ぅん……あの子が、妹さん？」

「うぇ！？　あ、ああ」

「そっか。確かに可愛い子だね」

そうだろ？

高校一年生とは思えないほど抜群のスタイルに光を程よく反射する長い金髪。少しつり目がちなのは気が強そうに見えるが決してマイナスにはならないし、もうどこのパーツを見ても一級だ。

あんまり可愛いから悪魔と間違われることもあったりするくらいだ。

「……なら、ちょうどいいしさ……」

「ん？」

まだ蕩けた顔のウェルミは唇を舐めあげ、とんでもないことを言い出した。

「見せつけちゃおっか……？」

「はっ、て、おぉ！？」

顔を両手で挟まれ、いきなり引き寄せられる。同時にウェルミも顔を持ち上げ、その唾液でテラテラと光る唇を近づけてきた。口は軽く開かれていて、その奥の真っ赤な舌が見えた気がする。

いや、未咲の前でキスをするわけには、

むにゅう

あ、柔らかい……謀られた！？

抵抗しようとするなら右腕でウェルミを押し留めるしかないのに力を込めるとウェルミの胸を揉むことになる。

な、なんて高度な罠だ……ウェルミどころか俺も損しない！

これじゃ抵抗もできないじゃないか……ウェルミ……恐ろしい子……！

「タネ君、キスしたい？　それともおっぱ、」

ズガン！

ふわりとウェルミの髪の毛が一瞬だけ空中を漂う。

「ふぇ……？」

俺は俺で耳を掠めた衝撃に冷静になった。

……確かにウェルミは策士だ。ただ、ウェルミの誤算は未咲の性格を見誤ったことだろう。未咲はこういう光景を目撃しても赤面してショートしてしまうほど純情でもなければ、興味深げに観察するほど変態でもない。

きっと、未咲を見れば両手にゴツい拳銃を構えて冷ややかな目でこちらを見ているに違いない……怖くて見れないが。

ＩＭＩデザートイーグルのミサキモデル。

イスラエルのＩＭＩ社が生産している流通品を親父が未咲のために改造したものだ。

従来のデザートイーグルはハンドキャノンと呼ばれ、ハンドガン

の中でも随一という威力を誇っていたものの、その影響で女子供が撃つには反動が強すぎた。
しかし、ミサキモデルはその反動をさらに増加させる変わりに威力に上方修正がかけられている。火力至上主義の親父に似つかわしい改造だ。
当然、そんな無茶な改造が施されているから未咲が片手で軽々と扱っているそれは、引き金を引いた瞬間に普通なら男が両手で構えて使っても肩が脱臼してしまう程の反動を生む。
……それは俺が実証済みだから信じてくれていい。
その威力は、それなりの太さがある樹木を数発で根本から折ることができるほどだ。人間の頭なんて一発で床に叩きつけられたトマトのようになってしまうだろう。
未咲がそれを楽々と使うのは反動を受け流す技術がずば抜けていることと、体質的に筋肉が異常発達しているから。さすが俺の妹。
……で、そのミサキモデルが俺とウェルミの頭に向けられている。

「だいたい、その方は悪魔じゃないですか！　なんで家に悪魔がいるんですか！？」
「そりゃ、私とタネ君が男女の関係だから、」

ズガン！

ウェルミ、冗談を言うなら腕か足を失う覚悟をした方がいいぞ？
ただ、未咲も相手の話しは最後まで聞こうな？　我慢ができない子は社会に出てから足元見られるぞ？

「……貴女のお名前を尋ねてもよろしいですか？」
「ウェルミだよ。ウェルミ・トーリァス・フクティオニス・ハナ。言っておくけどどんなに改造したって銃なんかじゃ私は怪我もしないよ？」

ウェルミが少し馬鹿にしたような顔で未咲を見るが……ウェルミ、それは誤解だ。

「“悪魔殺し”って知ってます？」

「え？　う、うん……」

依然として堂々とした態度の未咲に今度はウェルミが気圧される。いや、そもそも未咲は最初から優位を譲ってなどいなかったが。

悪魔殺し……本来、物質的な人間は霊的な悪魔を殺すことができない。どちらも同じような姿をしていても体の構成が異なるためだ。

とはいっても人間も魂という霊的な一面を一応は持っているため悪魔に触ったり、殴りかかったりということはできる。

しかし、ただの銃やナイフでは傷一つ付かない。すり抜けるわけでもなく、銃弾やナイフが砕けるわけでもないが互いに干渉しないまま終わってしまうのだ。

だからこそ、銀の弾丸や杭など“効果があると信じられているもの”や祓魔術でしか悪魔には干渉できず、また、それでも完全に霊的なものではないため殺すには至らない。

ただし、逆に悪魔が人間を殺すことができないかと言われるとそうでもない。確かに悪魔の魔法は人間を怪我させる程度だが、人間界には物質的な凶器が数多く存在する。つまり、悪魔は銃やナイフを使うだけで人間を殺せるのだ。

そうやって、一方的に人間を殺せるため悪魔は悪いものとして誤解されている。

「私と兄様はその“悪魔殺し”です」

「へ？　……タネ君も？」

その関係を覆してしまうのが“悪魔殺し”と呼ばれる一部の人間。

特殊な生まれの“悪魔殺し”は物質的な体に比べて霊的な魂の割合が非常に大きい。そのため、彼らがもとから悪魔に有効な武器を使うと霊的属性の絶対値が高まり、結果的に物質に攻撃であっても悪魔を殺すに至るのだ。

純粋な霊的攻撃ではなくても、圧倒的な霊属性を叩き込めばいいのだ。とはいえ燃費が悪く悪魔の魔法に大きく影響されるというデメリットも存在するため、やはり悪魔が有利ではあるが。

「なので、私は貴女の頭を吹き飛ばすこともお腹の風通しをよくすることも可能ですよ？」

「いや、いくら“悪魔殺し”だってただの銃じゃ」

家まで来る途中でウェルミに未咲には祓魔師としての才能が無いと言ったのが原因だろう。

ウェルミはまだ未咲を過小評価している。

……俺が言ったのは生身での祓魔師としての才能の話であって、

「この銃、各金属部品は教会の十字架を再利用したもので、弾丸は聖水に漬け込んだ純銀弾です」

「……よーし。未咲ちゃん、その物騒なもの下ろそうか。いや、下ろしてください」

武装した未咲は“悪魔殺し”という特性も相まって既に一流と言えるほどの殺傷力を持っている。

未咲が祓魔師として見習いなのは祓魔術が一つも使えないからだ

……そのくせ悪魔はしっかり見分けるが。

「……どうせ、兄様から私には才能がないと聞いていたから余裕をみせていたのでしょう？」

「う〝……」

「……だから、悪魔は嫌いなんです。すぐに騙される愚かな性格だから……」

銃を太もものホルスターに仕舞いながら未咲が溜め息を吐く。

未咲は悪魔に対して普段から偽悪的に振る舞うが、その実誰よりも悪魔に優しい子だ。今のだって悪魔を心配しての一言。

未咲が本当に嫌っているのは悪魔を利用して富を築く人間だ。

「で、でも、タネ君は嘘をついてないよ！」

「いや、弁護しなくていいから。俺は確かに全部を伝えはしなかったしな」

未咲が銃を下ろしたのを確認したウェルミは俺の下から抜け出し、俺と未咲とちょうど間に立った。

悪魔はすぐ騙される、と未咲は言うが、どちらかというと人をすぐに信じてしまうのだ。

例えば中世ヨーロッパにはこんな話がある。

ある農家が悪魔と契約し、収穫した作物の半分を与える代わりに一年の豊作を約束させた。

これだけなら普通の話だ。

しかし農家は契約の際に上半分か下半分かを悪魔に選ばせ、悪魔は上半分を選んだ。

それを聞いた農家はカブを植えて、収穫したカブの葉だけを悪魔に与えたのだ。

結局、悪魔は契約に縛られていたため泣く泣くそれをもって帰ったという民衆の間での笑い話。

これを聞いたとき、俺は悪魔も右半分って言えばよかったのに……などと単純な感想を思っただけだが、未咲は農家に対して涙を浮かべるほど激怒した。ノンフィクションだったら農家を殺しに行くのではないかというほどの怒りようだったのを覚えている。

「……悪魔は正直すぎます。貴女たちは狡賢い人間の間では暮らしていけません」
「正直なのはいいことでしょ？」
「……悪魔というだけで人間は貴女たちを恐れるんですよ？」
「誠意をもって接することができれば仲良くなれるよ！」
「無理です。悪魔という存在を知る人間にとって貴女たちは金儲けの道具です。人ではないからと自らの欲望を叶えるためだけに貴女たちに酷いことを強制するでしょう」

……悪魔は美形が多いからな。使い道はいくらでもある。

「そ、そんな酷い人とは一切契約しないもん」
「へぇ……ではもし兄様が貴女と名前での契約をしたいと言ったら出来ますか？」

未咲がここで始めてウェルミに微笑みかける。
俺にはその微笑がなにやらあくどいことを考えているようにしか見えなかったが……未咲はマイエンジェルだから見間違いに違いない。

「え！？　えと、タネ君が、良ければ……」

急にウェルミがもじもじしだした。
まぁ、悪魔にとって名前での契約というのは同時に一人としか契約できず、ほぼ全ての契約よりも優先されるという大事なもの、つまり人間で言う婚約に近いから仕方がないのかもしれない。
名前での契約より優先される契約はただ一つしかないため、人間からしてみれば一生ついてくる都合のいい奴隷みたいなものだ。ただし、死んだときに魂をもっていかれるらしいが悪魔を使って私欲

を満たそうとする連中は死後になど興味がないだろう。

「そうですか。ですが兄様は既に六名の悪魔と名前での契約をし、その全ての悪魔の生活を縛ることを命令していますよ？」

「未咲っ！？」

「え……」

いや、嘘は言ってないけどさ！

……俺が彼らにした命令は嫌なことには嫌と言え、なんていう内容だ。この命令さえあれば悪魔はこき使われない。

あとはそれを確実なものにするための命令をちょこちょことしているだけで、未咲が言外に含ませた悪そうなことは何もない。

……だからウェルミの不安そうな目が痛い。

「もし契約していたら貴女は兄様の性処理の道具になっていたでしょうね。いえ、貴女は兄様に好意を抱いているようですからそれでもいいのかもしれませんが……」

「そんな……」

俺、そんなことしない！

というか未咲って俺のことそういう風に見てたのか……？

だとしたら、そうとう凹むぞ……

「ああ、もしかしたら誰か他人の“お世話”をするために売り飛ばされるかもしれませんね。実際、三人ほど兄様とは関係のない人のお世話をすることになっていますし」

「えぅっ……」

いや、確かに何人か老人介護とか看護師とかになって人の世話をしてるけどさ……その世話を性処理みたいにか聞こえるように言う

のはどうかと思う。
自分が見知らぬ人間にそんな道具として扱われる状況を想像したのか、それとも俺に裏切られたと思ったからか、ウェルミの目に涙が溜まっていく。
……泣きたいのは俺もだ。

「でも、私、タネ君しか頼れる人が……」
「兄様が契約した悪魔のうちの半分はそういうこちらに来たばかりの騙されやすい悪魔です」
「ちょ、」
「そんな……」

ウェルミの瞳が揺れる。
俺、悪いことしてないのに……というか悪魔の自由を助けてるのに……
やっぱり、俺って未咲に嫌われてるのか……？

「それで、まだ兄様と名前での契約をしたいと思いますか？」
「あ……あぅ……タネ君は、」
「ご自分の頭で判断してください」

救いを求めるように俺を振り向こうとしたウェルミの視線を未咲が声で遮る。

「いいですか？　人間界で暮らそうと思うなら自分の考えを何よりも大事にしてください。そうでないと、また騙されますよ？」

……未咲みたいなやつにな。
いくら悪魔に注意を促すためとはいえ酷いぞ。お兄ちゃん泣いちゃうぞ！

「んと……少し、考えてみるね。タネ君、今日はありがとう。未咲ちゃんも」

ウェルミも力がこもっていないような足取りで廊下へと向かっていく。

……大丈夫か？

俺とウェルミの関係が、ということではなくウェルミの今後が心配になった俺は未咲に目配せをする。

ウェルミはまだ管理祓魔師としての俺とも契約をしていない……それは悪意から身を守るための盾の一つがないということだ。今回のことで自暴自棄になったりしたら最悪の結果だってあるかもしれない。

未咲自身、それを理解しているのか深いため息をついてくれた。

「……まぁ、ほとんど嘘ですけど」

「えぇ！？」

そして無情なまでに平坦な声による未咲の暴露にウェルミがずっこけた。

いやー、よかった。

このまま放置してたら色々と大変なことになってたぞ。

「え？　え？　嘘ってどこからどこまでが？」

「兄様が悪い人物だと言うのは全部ウソです。そんな人だったらさっき躊躇わずに撃ち殺してましたよ。もちろん兄様を」

「ひぃ！」

……あれ？　今の一言ちょっと嬉しい。

なんか、未咲が俺のことを悪くない人みたいに思ってくれてるっ

て意味だったよな？
あの、未咲様？　それなのに、なんでそんなに鋭い眼で睨んでくるのでしょうか？

「兄様がこの人を襲っていたのは事実ですから」
「えぇー……否定できないけど否定したい……」
「で、ですが、まぁ、兄様が妹離れし始めたいい兆候とも、」
「いや、それはないな」

少し俺から視線を逸らしてそんな天と地がひっくり返るよりもありえないことを言う未咲を間髪いれずに否定してやった。

「……言い切らないでください」

す、澄ました顔してるけど実はほんのちょっぴりほっとしてるんだろ？
……してくれないと泣いちゃうぞ。
兄離れできないのは未咲もなくせに……

「まぁ、そういうわけで。ウェルミさん。貴女は人間界で暮らすには純粋すぎますよ。すぐに帰ることをお勧めします」
「お、おい……」
「それは、嫌……夢があるもん」
「夢？」

……人間と結婚するってやつか。
男の俺にはよく分からないが……結婚式ってのは女の子にはキラキラして見えるんだってな。
未咲もブライダルショップの前なんかを歩くと貸衣装（ウェディングドレス）をチラチラと見ながら歩くし。

……男が刀とかに憧れるのと似たようなものなのかもしれないな。
「私。結婚式を挙げたいの……でも悪魔はそういう習慣が無いから人間界で人間と結婚しないといけなくて……」
「……なるほど」

これが吉と出るか凶と出るか……
一人の女の子としての未咲は多分ウェルミを応援するだろう。
ただし、“悪魔殺し”としての未咲は反対するかもしれない。
まぁ、十中八九、

「はぁ……そんな真剣な目で言われてしまったら何も言えませんね。そもそも私は祓魔師でもなんでもないのでアドバイス以上のことを出来る立場にいませんし、最終的に選ぶのは貴女ですから」

未咲は優しい子だから、相手の夢を諦めさせるなんてことは出来なかっただろう。
ほんの少し、憎まれ口で話してしまうのは照れ隠しからかもしれない。

「未咲ちゃん……ありがとう！」
「で、ですから、私はアドバイスをしただけで、」
「タネ君との結婚を認めてくれるってことだよね！　妹さんの許可は下りたからあとはご両親だけだね！　タネ君！　もうすぐ私たちの念願がきゃっ！？」

ずががががん！

「誰が、なにを、認めたのでしょうか？」

床に六発分のクレーターを作った未咲はにっこりと、十人中十人が見とれてしまうような笑顔を浮かべながら未咲は俺とウェルミを交互に見つめる。
なんで俺まで……？

「えっ？　だって、私が結婚することには反対しないんだよね？」
「えぇ」
「だったら私とタネ君が結婚でき、」

ずがん！

あぁ、床に七個目のクレーターが……これ、直すの俺なんだろうなぁ。
いっそのことコンクリ直打ちにしようかな。それなら直すのも簡単だ。

「兄様！？　どういうことなんですか！？　十秒で答えないと撃ちますよ！？」
「え！？　や、えっと、えぇ！？」

なんでここで俺に振るんだ！？
まぁ、待て。
クールになって事態を一度冷静に見つめ直そう。
ウェルミは結婚を反対されなかった—×→俺とウェルミが結婚できる。
当然つながるわけがない……まぁ待て。もっと落ち着こうじゃないか。
ウェルミは結婚を反対されなかった→なぜなら未咲が優しかったからだ→未咲マジ天使→超可愛い—×→俺とウェルミが結婚できる。
ダメだ……どう工夫しても繋がらないぞ。

「十秒です。兄様、説明して下さいますか？」
「十秒貰って悩んだ結果、要するに、だ」
「はい」
「未咲が可愛いということを再確認した」

ずがん！

ぎゃぁ！？

ずがががががん！

え、ちょ、まっ、待って！　まだ死にたくない！
なんだ、なにを間違えたんだ？
……あ、そうか。

「兄様。もう一度だけ聞きます。どうぞ」
「未咲は可愛いんじゃなかった。超可愛いんだ」
「なっ！？」

なんで俺の眉間に銃を当てるんだ！？
って躊躇いなく引き金を引かないぎゃーーーーーっ！？

かちん

……っほ。
……た、弾切れか。
ま、まぁ、未咲だって俺を本気で殺そうとしてたわけじゃないんだし、もちろん弾切れだってことを分かって引き金を引いたんだよな？

な？

「……ちくしょう」

「！？」

素！　素が！

未咲、お客様の前！

お客様の前での未咲は清楚で大人しい子になるって、そう自分で決めたんじゃなかったのか！？

……銃をぶっ放すのは……まぁ、兄的には照れ屋さんな感じでギリギリセーフだ。

「お兄ちゃんの……」

「の……？」

「しすこん！！」

いえすあいあむ！

という前に拳銃のグリップで殴られ、俺は意識を失った。

お兄ちゃん、ってのは久しぶりだったなぁ……いつもは兄さんだったし……我が生涯に一片の悔いなし。

がくっ

「タネ君！？」

目を閉じる前に未咲の足の裏側が見えたような気がした

■□■

ふーっ、ふーっ、ふーっ

……この、この、この、このぉ！

「ちょ、未咲ちゃ、そんなに踏んだらタネ君死んじゃ……死んじゃってる？」
「兄様は、頑丈なので、これくらいじゃ、明日にでも、ピンピン、してますっ！」
「いや、そんな渾身の力で踏んでも平気なの！？」

ええ、全力ですよ！？
それが何か！？
微妙に満足そうに気絶している兄さんのお腹を思い切り踏みつける。

「だ、ダメだってば！」
「止めないでください！」
「ダメ！　人間界には未必の故意って言うのがあるって教わったもん！　死にそうな人がいるのに助けなかったら罰せられちゃうんだよぉ！　私まだ魔界には戻りたくないのっ！」
「う、うぅぅぅ〜〜〜〜〜！」

ウェルミさんが私を羽交い絞めにして止める。
この、実妹を可愛いとか超可愛いとか誉め殺そうとするバカ兄に天誅を下さないといけないんです！
ほんとに……兄さんも妹じゃなくて他の女の子に目を向ければそれなりにモテるはずなのに……
このウェルミさんだって、悪魔とはいえ貴族で称号も持ってる、実際には私たちには手の届かない……こともないけど、そんな存在の人に好かれるくらいなんだし。

「……兄さんのバカ」

私のことなんて……あのことも、もう気にしなくていいのに。
「未咲ちゃん、顔真っ赤だよ？」
「だ、誰が！」
もう……昔のことなんて思いださなきゃよかった。
昔は、私も兄さんに懐いてたから思い出すだけで勝手に顔が赤くなる……
「はぁ……」
「未咲ちゃん？」
「ウェルミさん……名前での約束をしませんか？」
名前での約束。
名前での契約と似てるけど唯一違うのは守るべきものがその約束した内容だけという点。
契約だと、それ以降悪魔は逆らえなくなっちゃうから……ううん、逆らわなくなる、かな？
悪魔は、本当は悪魔なんて呼ばれていいものじゃないのに。
約束は絶対に破らないし、約束したことがどんなに無茶でも必ず果たそうと努力してくれる。
それは悪魔が人間との約束を果たすことに……人間の笑顔を見ることに幸福を感じてしまう生き物だから。
本当に、悪魔という文字の意味を体現してるのは、そういう悪魔を騙して無理難題を押し付ける人間の方。
「……いいよ」
「人のことを疑いましょうって行ったばかりじゃないですか……」
私が悪魔を心配するのはこういうところがあるから。

悪魔は、人の善性ばかりを信じようとして、自分の身に危険が降りかかるかもしれないなんてことを考えない。
考えても自分で否定しちゃう。
どんなに騙された悪魔だって、次こそは、きっと次は大丈夫って……悪魔はずっと希望に生きてる。
兄さんが名前での契約をして一方的に救ってしまったのも、そうやって騙され続けて傷ついた悪魔たちを見てたから……だから、私は悪魔が騙される前に護ってあげたい。
……まぁ、そのくせ悪魔に約束って言葉を使って縛ろうとしてるのも私だけど。

「それで？　何を約束したいの？」
「……その、本当に、本当に心から求めてしまうくらいになるまでは……言葉にしないでください」

子供でもしないような目的語が無い約束。
本当なら、悪魔相手にこんな約束はしちゃいけない。
後からいくらでも言葉の意味を変えて相手を縛ることが出来てしまうから悪魔だって受け付けない。

「……うん。分かった。ウェルミ・トーリァス・フクティオニス・ハナは花氏未咲に約束するよ」

なのに、この人は……バカです。

「ありがとう……ウェルミ」

第二話（後書き）

次回は日付を変えて学校編。

……誰をメインヒロインに据えようかな

ガールズラブとかボーイズラブはあるけど近親相姦タグが無い・・・

第三話（前書き）

ヒロイン三人目登場。
この先の展開も固まったのでお試し外してみましたー

第三話

ウェルミが家に住み着いてから六日目、とうとう転入生としてウェルミが学校に来た。

「ウェルミ・ハナです。まだ日本に来てから少ししか経っていないので分からないことばかりですが仲良くしてください。よろしくお願いします」

朝のショートホームルームでウェルミが転入生として自己紹介をし、ぺこりと頭を下げる。

……なんというか、雑だ。貴族の令嬢ならもう少し洗練された所作とかあるんじゃなかろうか。こう、スカートの裾を持ち上げたり、みたいな？　まぁ、うちの制服はスカート短いが。

しかし……知ってるやつが転入してくると妙な気持ちになってくるな。

野球の試合で勝ったのに素直に喜べないベンチの気持ち……に近いだろうか？

「うわぁ……」

「すっげぇ美人！」

「……E。いやFだな」

そして、このクラスの反応だ。

最後のやつ……なかなか見所があるな。

でもウェルミは多分もう一サイズ上だ。触った俺が言うんだから間違いない。手に収まらなかったしな。

しかし、やはり美人な上に抜群のスタイル、そして白磁のような肌と少し青みを帯びた白銀の髪はクラス全員の視線を独り占めにし

た。
ウェルミに注目している全員が、海のように深い蒼の瞳に見つめられることを望み、そのバラのように紅い唇が次に紡ぐ言葉を待っている。
今日はちょっと詩的な俺だ。
「あー、今聞いたように彼女は留学生だ。日本語自体には問題ないとホームステイ先の保護者から聞いているが、微妙なニュアンスの言葉は伝わらないだろうから注意してくれ」
俺達の担任――現国教師も務める鈴木――がウェルミの自己紹介に軽く補足した。
……あててんのよ、まで熟知しているウェルミに伝わらないニュアンスなんてないような気もするけどな。
まぁ、この数日間でウェルミが真面目な小説やらマンガやらから言葉を学んでいたことも発覚したし、現代日本で暮らすにしても言語の上では何の問題はないだろう。
「そうだよな、花氏（はなうじ）？」
「へ？」
俺？
「へ？　ってお前……親御さんから電話でお前の家にホームステイしていると聞いたぞ？」
お袋、いつのまにウェルミのこと知ったんだ？
普段はこっちから連絡しようと思っても絶対につかまえられないんだが……
そこまで考えてようやく答えに思い当たった。

「あー……未咲か」
「お前は生徒会長の一人でもあるし、妹さんも優秀だからな。信用しているぞ」

未咲はお袋の声真似得意だったな……でも未咲がそこまでするとは意外だ。
むしろ目立つことが苦手な未咲のことだから住所や俺達とウェルミの関係は隠すものだとばかり思っていた。

「え、花氏の知り合いだったの？」
「というか同棲？」
「なんというエロゲ展開……花氏、餞別だ」

ん？
呟きに混じってなにか飛んできたぞ？
五センチ角の薄いメタリックな袋。業界最薄という印字の上にマジックで紳士の嗜み＆（ムリヤリ）ダメ、ゼッタイと書かれている……余計な気遣いだよ！
袋が飛んできた方向をキッと睨み付け……そして、俺はその近藤さんをそっと財布にしまった。
紳士の嗜みだからな。うん。

「ところで、私の席は……？」

俺の隣の空席をじっと見つめながらウェルミが言った。
ウェルミはこの席に座れると思っているんだろうが……残念ながら確実に、とは言いがたい。いや、むしろ確率的には低い方だろう。

「む、そうだな……境、準備室から机一式持ってきてくれ」

「え？」

俺の隣の席が空席であるにもかかわらず、新たに机と椅子を運んでくるよう生徒に命じた鈴木の声にウェルミが……ウェルミだけが驚いたような声をあげた。

他の生徒は当然という顔かまたかという顔でいる。

俺の隣のこの席は、本当は誰かが座るための席ではない……全員がそれを知っているからこその反応だった。

いわゆるいわく付きの席なのだ。

「せ、先生……あの席は、空いてないんですか？」

「え？　あ、いや、空いていないと言うわけではないんだが……」

「なら、タネ君の隣の方が安心できるのですが……ダメですか？」

「むぅ、しかし……」

ウェルミが俺の隣の席を指して言う。

まさかウェルミから席のことを聞かれるとは思っていなかったのだろう。鈴木が不自然に口ごもった。

当然、それを見逃すウェルミではない。

勢いに乗ったウェルミがやんわりと、しかし見方を変えれば確実に退路を塞ぐようにして言葉を重ねていき、最後には堂々と俺の隣の席に座ることを認めさせた。

「タネ君……きちゃった♪」

「いや、そういうのいいから」

上機嫌なウェルミが俺にギリギリ聞こえるか聞こえないか、という程度の声で話しかけてきた。

まぁいわく付きといっても、もともとこの席に座っていた女子生徒が運悪く交通事故で命を失い、それ以降、その席に座った生徒は

幽霊に取り憑かれて元気がなくなるっていう程度のよくある話だ。
仮にその噂が本物だったとしても悪魔であるウェルミには影響もないだろう。
本物、つまり人間の恨み辛みといった思念程度で悪魔がどうこうなるなら悪魔を処罰するという意味においては祓魔師は必要なくなる。
最近は人間から悪魔を護る仕事の方が多いからやっぱり必要だけどな……ようやく国も悪魔に対して非公式ながら人間と同じだけの権利を認めるよう法整備をしたし。

「ハナ、体調が悪くなったらすぐに言うように」
「わかりました」

鈴木が新入生を気遣うフリをしながら、いざという時になるべく早く対処できるよう布石を打つ……鈴木自身は一般人だが、この席に何かがあることは特別でなくても気付く。
事実、このクラスの生徒は誰一人としてこの席に近寄りたがらない。
酷いときは座った瞬間に貧血を起こす生徒もいたわけだが……ウェルミは本当に大丈夫そうだな。
程良く蛍光灯の光を反射するウェルミの銀髪を何とはなしに眺める。少し蒼みがかった髪の毛は枝毛どころか癖さえない。背中側から見ればストンと一直線に下ろされているのが分かるだろう。

「んー？　タネ君、なにかな？」
「いや、別に」
「私のセーラー服に見惚れてたんだね！」
「それはセーラーじゃなくてブレザーだ……」
「……た、タネ君を試しただけだよ！」

さいですか。
……まぁ、少し安心だな。
美人過ぎるからって理由でウェルミを苛めたりするやつもいないだろうし、むしろ化粧っ気のないウェルミを世話してくれたりするかもしれない。
女子ってそういう女の子ならではのテクニックの交換とか好きみたいだからな。未咲も家に友達が来るとそんな話をしていたような気がする。

「すぐ一時間目が始まるが……それまでに簡単に知り合っておくように。花氏、騒ぎすぎないように見ておけよ」
「あーい」

鈴木がそれだけ言って教室を出ていった。
俺たちの次の授業はスズキが受け持っている現国だから出ていく必要はないし、普段もこのまま教室に居座っているのだが……わざわざ出て行ったということは一時間目は親交を深めるために使えということか。
鈴木は頑固なところもあるが、逆に今回みたいに柔軟な対応をしてみせたりもする。
本人としてはどちらも教師としての本分らしいが。

「おーし、じゃあ花氏、仕切って」

どこからかそんな声が上がる。
まぁ、いつもの役割というやつだから慌てたりはしない。
実際、これが発展して先月引退した三年生に代わって生徒会長なんてものになっていたわけだし。
じゃー、花氏バトンタッチ。頼んだよ♪
そんなことを前生徒会長に言われて。

「じゃあ青井夢から出席番号順に一回ずつ質問だ。一人一分。はい始め」
「え！？　えっと、ウェルミちゃんって呼んでいい？」
「うん……あ、でも男の子はダメー♪」

盛り上がりかけた男子のテンションが一瞬にして押し戻された。
……ふむ。
これは生徒側からの自己紹介にもなっていいかもな。俺がフルネームを読んで向こうが馬鹿をやらかす。そんなノリになるはずだ。
これじゃ質問タイムというかアピールタイムだな。

「はい次、赤西賢太」
「俺と一生を浪費しないか？」
「えっ！？」

いや、ウェルミ……期待しているような目でチラチラ俺を見るな。
そして不満そうに眉を寄せるな。
意味が分からない……こともないが俺は引きとめたりする気は全くないぞ。ただイケメンだからと選ぶなら健太の顔をよーく見てから決めた方がいいとは思うが。

「……脈は無さそうだな！」

すまん、賢太……お前もパッと見イケメンだから、いい人探してくれ。
ただ、プロポーズに浪費って言葉を混ぜちゃダメだろ。せめて消費くらいにしておけ。

「次、阿久津亮」

「な、なにカップですか！？」
「はい次、石破雛里（いしわ ひなり）」
「阿久津を殺していいですか？」
「許可する。宇都美拓也」
「雛里を止めるフリして胸を揉みしだくぞ？」
「真面目にやれ」

もはや質問ですらなくなってるぞ。

「オーケー、真面目に揉む」
「ひゃんっ！？　ちょ、宇都美、ひぃん！　ばかぁ、ふざけんなよお……」

まったくだ……このクラス、大丈夫か？
まぁ、今の三人は幼馴染だしいつものことか。石破の甘い喘ぎ声に何人か前屈みになっているが気にしない。いや待て、そこのお前は女のはずだよな？

「えー……次、草野真昼（まひる）……と草野深夜（みや）」
「「私ら一纏めかっ！」」
「どうせ、どっちがどっちかって質問だろ？」
「「う……そうだよ。どっちだっ？」」

双子らしい一発ネタではあるが……そもそも初対面の相手にその質問は意味ないだろ……クラスに二人しかお前らがどっちか分かる奴いないんだぞ？
もちろん二人というのは本人同士のことだ。

「んー……こっちがまひるちゃんで、こっちがみやちゃんだ！」
「「見破られた！？」」

なんて言っていたら三人目が生まれたようだ。

「二人とも名前が呼ばれたときにピクッとしてたから」

「「視力いくつだよ！」」

「わ、わかんないや……えへ」

と、まぁこんな感じでそれなりに騒がしく転入生への質問タイムは進んでいく。

途中途中、好きな食べ物や趣味など普通の質問をした奴がつまんねぇやつとか言われていたが概ね平和に進行していた。

「ラスト、渡辺みやび」

俺が危惧していた質問も飛び出してこなかったから一安心だ。

さすがに、

「ウェルミさんと花氏の関係はなに？」

なんてベタな質問するやつはいなかっ……いな……ってちょっと待て！？

最後の最後で！？

クラスのやつらも目を爛々と妖しく光らせてるし……最初から最後に聞くつもりだったな！？

おのれ渡辺……！　六組の諸葛亮のあだ名はだてじゃないな！

というか、まずいぞ。

タネ君の未来のお嫁さん♪　とか言われたら……男子どもに殺される。

しかもウェルミはそういうの恥ずかしがらずに言うし……というか俺にはなにより未咲がいるし。

「えとえと……私は、タネ君の……」
「「「「花氏の！？」」」」
お前ら、詰め寄るな！
確かに格好のネタだってのは分かるけど、
「あ……うん、少し遠い親戚かな？」
「「「「なんだー」」」」
「残念でしたー♪」
お？
ウェルミ、空気読んだのか？
おかげでクラスは拍子抜けな感じの空気になったが……おい、花氏だし当然かって言ったやつ出てこい。
え？　だって未咲ちゃんがいるだろ？　なるほど。
……確かに大正解だが、人の妹を勝手にちゃん付け……それも名前で呼ぶとはいい度胸だ。
「ちょ、ギブ！　花氏ギブだって！」
「ふん。どうしても名前で呼びたいなら未咲様って呼べよ？」
うちの妹に手を出したら……分かってるよな？
「じゃ、時間も余ってるし……あとは勝手に質問しとけ。俺は生徒会室行ってサボるぞ」
「あ、タネ君！　私も、」
「学生が授業をサボるな。というかお前がいなくなったら質問できないだろうが」

えぇー、という声が教室全体から発せられたが無視だ無視。
それにお前らが好き勝手に出してくる要望とか十月の体育祭のことも纏めなきゃならないんだよ。まったく、お前らのために仕方なくサボってるんだからな！

「花氏、それは放課後にやれよ」
「やなこった」

なんで未咲と過ごせる貴重な一家団欒の時間を犠牲にせにゃならん。

■□■

うちの高校の生徒会は複数あるが、それぞれが独立した校舎を仕切っているため、その一つ一つが別の高校だと考えても問題はない。
その影響で、校舎によって校則が違ったりもする。例えば普通科以外の科棟では制服を着なくていいし、隣の……何科かは忘れたが、そこでは始業時間が夜の九時、他の生徒が立ち入りを禁じられている時間に勉強をしている。
そして、基本的に生徒は自分の所属していない他棟に干渉することを許されていない。これも人の学校に遊びに行ってはいけないのと同じようなものだろう。
つまり何が言いたいかというと、この校舎の中では俺が生徒の代表ということであり、

「げ……なんだこの書類の山」

影で一番苦労している生徒なのだ。
自習をサボって仕事をするくらいは許してほしい。

「えーと、なになに……購買のメニューを……自販機を……あの冷たい水が出る機械とか言われてもわかるかよ。あれなんて名前だよ」

……なるほど。

この束は先月に設置した目安箱の中身か。

中には女子更衣室に監視カメラを、なんていう悪戯としか思えないものもある。いや、悪戯であってくれよ……さすがに俺の代で生徒から犯罪者を出したくはない。

設置してまだ日が浅いからやたらと要望がくるが、ひと月もしたら皆飽きるだろうし、こっちが対応できるレベルも見極めてくれるだろう。

「ぁ……かいちょー、やっぱり来てました」

「んぁ？」

「ひゃぁっ！　の、覗くつもりはなくて……すいませんすいません！」

ペコペコと謝りだしたのは、普通科生徒会書記の弓緋之（ゆびの）ココ。なぜか俺と未咲に対してだけ異常に怯える一年生だ。

まぁ……怯えるからといって容赦しないのが俺たちの流儀だが……弓緋之自身、俺達のことを嫌ったり苦手だったりしているわけではないというのも容赦しない一因だ。いじると楽しいとも言える。

実際、未咲の友達であり俺の片腕でもある弓緋之は、花氏家に遊びに来る回数が学校内で一番多いかもしれない。

ん？　なら、やっぱり怯えているというより低姿勢という方が正確か？

「出たな、不良キツネ……」

「キツネとか言わないでくださいっ！　神社のことバレたら……せっ、責任とってもらいますからね……？」

よし、黙ってよう……神主にはなりたくないからな。
まぁ、こいつの家は稲荷神社だ。
歴史も結構長いらしいが……巫女さんの服装を見られるのが嫌らしく本人は隠している。見られて減るもんじゃないし、それでお賽銭が増えるんだったらむしろガンガン見せた方がいいと思うんだけどな。未咲ほどとは言えなくても可愛いんだし。

「なら不良ピンクだ」
「あぅ……やっぱり、生徒会的には染めた方がいいですか？」

染める、というのは当然髪の毛のことだ。
弓緋之は遺伝的なのか分からないが地毛がピンク色をしていて、生徒会にそんなやつがいていいのか、なんてたまに問題になる。
とはいえ校則には地毛がピンク色ではいけない、なんていう記述もない上、校則違反を摘発する立場である風紀委員の未咲が金髪な時点でいろいろと手遅れだろう。あれも地毛だが……なんで俺は黒いのかね？
そもそも俺たち生徒会や風紀委員が生徒の良き手本である必要は必ずしもないと思っている。

「いや、そのままでいい。それより鞄を盾みたいにして俺に向けるのをやめろ」
「ひゃう……ごめんなさい……」
「や、だからって机の影に隠れたら同じだろ」

……やっぱり怯えられてるな。
目立つ桃色の髪が机の陰からぴょこぴょこ覗いている。
まぁ……生徒会は各自が生徒の代表なんだから、校舎全員の生徒の見本（サンプル）になるのは自然なことだ。

つまり、授業をサボる生徒会長や書記がいるのはこの普通科全体の校風をよく示しているということに……さすがに無理あるな。実はサボる生徒はあんまりいない。当たり前か。

「で、何しに来たんだ？」

「え……と、先輩が授業中に抜け出すのが見えたので、その……つい……」

「……目、良いんだな」

「両目ともに４．０です！」

アフリカ人かよ……

確かに普通科の校舎はコの字型だし、俺のクラスの真正面に弓緋之のクラスはあるが……

というか俺たちは自習だったけどこいつらのクラスは普通に授業やってるんじゃないか？

「……不良娘め」

「な、なら言わせてもらいますけど！」

「あぁん？」

「ひぅ……かいちょーは怖いです……」

いや、普通に聞き返しただけなんだが……まぁ、クラスでも微妙に目付き悪いとか言われたからな……その癖、女顔で可愛いとか言う奴らも出る始末だ。あいつらは俺をどうしたいのか一度聞いてみたい。

怯えさせても話が進まないし、本気でビビられても傷つくし笑顔で話してやるか。

「弓緋之？」

ニコニコ

「はぅっ……な、あ、うぅぅっ！」
「……友好的に接してやってるのになぜ唸る」
「かっ……かいちょーが笑うなんて正直不気味で……でも珍しいところ見れちゃいました」
「ん、なんか言ったか？」
「いいえ！　なにも！？　……お仕事、手伝いますね」

手伝うって言われても……読んで判子押すか捨てるかしかやることないしなぁ。
うーん……

「じゃ、俺が判子したやつファイルに纏めてくれ」
「はーい」

とててて、と小走りに寄ってきて隣に座ろうとしたところで弓緋之が止まる。
そしてターン！　生徒会室から逃げ出した！
……なんだそれ。
新手の手伝う詐欺か？

「まぁ、いてもいなくても仕事量は大して変わらないしな」

精々ファイリングが丁寧になるだけだ。俺は裏表も上下も気にせずに突っ込むからな。
えーっと、図書館に同人誌を……却下。
女子トイレの便器に小型ＣＣＤを……却下。
前生徒会長×現生徒会長の十八禁本を夏のコミックパラダイスで……ちょっと興味あるが却下。書くやつが一八歳じゃない可能性が

高いんだが、そこら辺はどうなんだ？　作る側は問題なし？
しかし……最初の三枚からして既にこの学校の腐敗加減がわかるぞ。というか二枚目、お前、学校中にカメラ設置しようとするな。
目安箱……撤去するか？

「ひとつは完全に犯罪だし……ん？」

あれ、弓緋之のやつ、鞄忘れてったな……はぁ、仕方ない。あとで届けてやるかな。
てか開いてるし……」

「ただいま戻りあーっ！？」
「わっ！？」

ななな、なんだよ、弓緋之かよ驚かせんなよ！
って、その仕切り板なんだ？
そこまでして俺との間に壁を作りたいのか？

「か、かいちょーが、私の鞄、あさってる……？」
「は？　いやいや、お前の鞄が開きっぱだったから、」
「きょ、今日、朝練で使った体操着とかブルマとかはいてた下着とか……見ましたね？」
「見てねぇよ……」

というか机の影に隠れながら目をうるませるな。
はたから見たら俺が襲おうとしてるみたいに見えるだろ。

「じゃ、じゃあ……嗅いだ、とか……？　朝練あったから汗の香りとか……！」
「嗅がねぇ！」

というか香りとか自分で言うんじゃない。いや、臭いだろとまでは言わないけどいくらなんでも香りって言うのは図々しすぎるだろ。なんかいい匂いなニュアンスがあるじゃねぇか。

「ひゃうっ……あ、あと！　きょ、今日のブラジャーは昔のでカップ数ひとつ小さくて……今はDカップなんですからね！」

「お、おう……」

「あっ！　信じてませんね！　いいです！　脱ぎます！」

弓緋之は叫ぶやいなや、リボンタイを解き、上からブラウスのボタンを外していく。

って、ちょ、待て！

神聖な生徒会室でなにやらかしてんだよって無視するな！

そして弓緋之はあっさり第三ボタンまで外して、

「た、たた谷間、ありますよね！？　信じました！？」

「だから、最初から誰も疑ってないし……気がすんだら早くボタンを」

「て、適当に返事してますね！？　というかどこ見てるんですか！」

実際に脱ぎかけの弓緋之を見るわけにもいかないから窓の外だ。

いや、マジでブラジャーまで見えるから勘弁してください……

「む」

あからさまに目を背けたのが癪に触ったのか、弓緋之の三日月型の眉がキリリと吊り上がった。

おかしい。

俺は間違ったことは何もしてないはずなんだが……

だんっ！

「おわっ！？」

今まで会議用の長机の向こう側にいた弓緋之が机に飛び乗り、獣のような敏捷性を発揮して俺の胸ぐらを掴んだ。

おい、お前、俺のこと怯えてたじゃないか。普段から間に何か挟まないとびくびくしてるじゃないか！？

「なんで疑うんですか！」

「疑ってねぇ、ってうぉ！？」

つい、目線を下ろすと、弓緋之の両腕によってさらに強調された谷間が俺の視界にアップで映り込んだ。

肌、白いなぁ……って危ね！？

「し、信じないなら……さ、触れば信じますよね！」

「や、意味わからん」

さすがに触ってカップ数分かるほどの経験はない。

「で、でも揉まれるのはちょっと……なので、私の谷間に指を入れてください」

……それも意味が分からない。

「……弓緋之」

「はい？」

……完全に自分のこと見えてないよな。

「えーと……激写！　第一普通科生徒会書記、授業中に生徒会室で生徒会長に迫る」

「はぇ？　……ひゃう！？　きゃっ！？　痛っ……たぁ～～」

適当なゴシップ記事の見出しを考えてみてそれを弓緋之に伝える。

それでようやく現状のおかしさに気付いた弓緋之が思い切り跳び退き、長机から落ちた。

うわ、派手にケツから落ちたけど大丈夫か？

「おい、弓緋之っ、」

「こ、ここ来ないでください！　ヘンタイ！　かいちょーのヘンタイ！」

「いや、おま……」

「うぅぅぅっ！」

弓緋之、唸っても全然怖くないぞ。むしろ逆効果だ。

あぁ待て。ブラウスを手で合わせて胸元を隠している弓緋之に近付こうとして泣き声にも聞こえる唸り声をあげられている俺……性犯罪者だと言われても言い逃れできないな。

そこからさらに弓緋之の定位置、つまり机の陰に座り込み、おまけに鞄を盾のようにかざしてフシャーっと威嚇してくる。猫かよ。

というか座ったまま後ずさるからスカートがまくれて下着が丸見えだ。

「黒か……背伸びし過ぎだろ」

「ふぎゃぁ！？　かいちょー！　へんたい！　変態かいちょー！」

「いや、変態って勝手に脱ぎだしたのは弓緋之じゃ、」

いや、思わずマジマジと見た俺もか。

「ち、違いますっ！　普段の私はこんなこと！」

「……まぁ、それは知ってるけど」

さすがに普段から脱ぐようなやつがいたらさっさと退学にしている。

そうじゃなくても俺はなるべく関わらないように生きるだろう。

「あぅ……ごめんなさい……なんか、今朝、学校に着いてからずっと妙な感じで……」

「妙……？」

昨日と今日で学校にあった変化なんて、それこそウェルミの存在くらいしか……

「えと……なんというか、心をつつかれるというか……内側が、刺激されるんです。あとは周りからも圧迫されているような……それで、生徒会室に来なきゃって思って……」

本当にウェルミのことを感知してるのかもな……神社の娘だし強い霊感があってもおかしくはないだろう。

生徒会室に来る理由は……俺の定期的なお祓いの効果で中の空気が微妙に神社の雰囲気に近いからとか？

まぁ、ウェルミもあれで結構な力の持ち主みたいだし、周りに影響与えるのも自然なこと……なのか？

「ま、仕事するか」

「はい……ん……あれ？」

「弓緋之？」

「いや、なんでも痛っ」

あぁ……さっきケツ打ったのが今頃痛んできたのか？

弓緋之も立とうと頑張ってるけど……痛くて力が入らないみたいだな。仕方ない……どうせ目安箱の中には急ぎの要望なんてないだろうしな。

「よっ、と」

「きゃっ！？　か、かいちょー、なにするんですか！？」

「動けないんだろ？　保健室連れてってやるから大人しくしてろ」

「だ、だからってお、お、お姫様だっこでですかぁ？　……うぅ。恥ずかしすぎます……」

ケツ打ってるんだから他の持ち上げ方じゃ痛むだろうが。

それにまだ授業中だし誰かに見られて恥かくこともないだろう。

「そ、そういう問題じゃ！」

おわっ！？

「あ、アホ！　暴れんなって……あんまり手間かけるとケツから落とすぞ？」

「あ、ぅ……うぅぅぅっ！」

「だから唸るなって……ほら、手しっかり回せ」

「は、はぃ……」

きゅっと俺の首に弓緋之の腕が回される。

しっかし、こいつ軽いなぁ……しかも柔らかいし暖かい。

未咲にはお姫様だっことかしたことないしなぁ……してあげたいなぁ……

きっと未咲のことだから鳥の羽みたいに軽いんだろうけど……一通り暴れないと大人しくならないだろうから、そこで落とさないように筋トレするか。

「か、かいちょー……」
「んぁ？」
「そ、そういえば、転入生来たって本当ですか？」
「ああ、うん。情報速いな」
「いえ、まぁ、その……」

なんだ？
急におとなしくなったな。
まだ一時間目だってのにもう知られてるのか……まぁ、ウェルミ、目立つしな。見れば誰でも転入生だって分かるだろ。

「び、美人さんって……本当ですか？」
「ん？　まぁ、そだな」
「そ、そですか」

なぜか弓緋之がホッとした顔をしているが……なんだ？　美人がくるとこいつになんの得が……
あぁ、そういえば未咲がなんか言ってたな……一年だと弓緋之が一番告白されてるとかなんとか。
未咲も可愛いが高値の華すぎて告白できないんだろう。だから親しみやすい弓緋之に流れる、と。そして二年に美人が来たとなれば自分が告白される回数も減るだろうってことか。
確かにウェルミは性格も社交的だしこれから先アタック多そうだな……変な約束とりつけられたりしないように気を付けてやらないと。

「どんな人でした？」
「んー……バカで正直で……まぁ人好きする性格ではあるな」
「……意外としっかり見てるんですね」

まだ一時間も一緒にいないはずなのに、なんて呟いてくる。
今度は落ち込みだしたな。情緒不安定だが……あぁ、女の子の日か。黙っておこう。

「まぁ、お前に隠しても仕方ないから言うけどウェルミのホームステイ先、うちだからな」
「へー……えぇ！？」
「今度紹介してやるよ。あいつも後輩って存在を知れば少しは大人しくなるだろ」

なんとなく、自分を目標にするかもしれない存在ができると成長するものだ。俺も高二になってから……相変わらずサボってるけど未咲以外には大して興味がないんだから仕方ない。

「と、着いたが……弓緋之、開けられるか？」

保健室の扉、引き戸だからかもしれないけどやけに重いんだよな。
さすがに弓緋之を抱き上げながらじゃ開けられない。足でも開けられないし。

「え、えと……手、離したく……離せないです」

まぁ、俺に抱きついてる形になるわけだし、離したら落ちるかもって考えると怖いもんなぁ。
ノックして開けてもらうか。
仕方なく扉を二回蹴る。

……冴島ちゃんの機嫌がよければ開けてくれるはずだ。
……。
……。
期限悪いのか忙しいのか……博打だが、仕方ない。
忙しいだけでありますように……！

「はーなーこちゃーん、あーけーてー」
「か、かいちょー！？　それ禁句で、」
「花子って言うなぁ！」

弓緋之の声を遮るようにして怒号が響き引き戸が物凄い勢いで開く。
そして必要以上の力で開けられた引き戸が開ききった後、反動で再び閉じた。
……まぁ、確かにそうなるよなぁ。

「……っぷ」
「か、かいちょー笑っちゃダメですよ……くふ」

いや、だって、鬼の形相で出てきたのにそのまま何事もなかったように閉じるんだぜ？
普通は笑うだろ。

「冴島ちゃん、開けてって」

俺の声に今度は普通に引き戸が開かれた。
開けた張本人が見えないが幽霊ってわけではなく……

「花子って言ったら殺す。ちっちゃいって言っても殺す。花氏胤！
貴様はいつか殺す……」

「はいはい、ベッド借りるよ」

冴島ちゃん――養護教諭・冴島花子の身長が小学生並みと言うだけだ。あまりにも小さすぎるため抱き上げている弓緋之の陰に隠れてしまっている。

もちろん成人はしているはずだが冴島ちゃんの年齢は誰も知らない。

一度、校長に聞いてみたことがあるがダラダラと滝のような汗を流すだけで何も教えてはくれなかった。一体どんな秘密が隠されているのやら。

それ以来、冴島ちゃんの年齢は動く骨格標本などと並んで学校七不思議になっている。脱落したのは段数が増える階段らしい。

「よっと」

弓緋之をなるべく丁寧にベッドに下ろす。

「あの……ありがとうございます……」

「気にすんなって。痛むか？」

「ま、まぁ……でも休んでれば大丈夫だと思います」

ケツは危ないから用心するに越したことはないが……

まぁ、意識もしっかりしてるし、どこか骨折した、なんてことはないだろう。

「……む？　ははーん……若いなぁ」

「冴島ちゃん？」

「いや、なにも言うな。確かに保健室でってのは興奮するからな」

「や、なにか勘違いを、」

「え？　ヤるんだろ？　先生も経験あるぞぉ」

「「ヤりません！」」

というか見た目幼女の分際でヤるとか言うな！　じゃなくてその身体のサイズじゃ最後までできねぇだろ！　でもなくて教師がそういうこと言うんじゃない！

だいたい普通に男が女を保健室に連れてきただけでどこまで妄想してるんだよ……

マジで誰かこの人にまともな大人ってものを教えてやってくれ。

「いや、だがな？」

「あん？」

「睨むな花氏胤。そんな、弓緋之の第三ボタンまで外して、制服も乱れてる。さらにお姫様だっこだろ？　誰でも同じことを、」

「ひゃわ！　か、かいちょーずっと見てたんですか！？」

「あぁ、もう……二人とも黙っててくれ」

そーですね。そう見えますね。

でもなにもしてないから必要ない波風たてようとしないでほしい……弓緋之も慌てる必要ないだろ。

ということで冴島ちゃん退場。

「ちょ、おま、掴み上げるな！　殺すぞ！」

「仮にも保健室のお姉さん目指してるなら物騒なこと言うな！」

「目指してるんじゃなくて保健室のお姉さんなんだよ！　お前はもっと年上をうやま、うわぁ！？」

ぽいっと……少しの間鍵閉めとけ。

まったく。

敬われたいなら性格か見た目くらい大人っぽくなれっての……

「バーカ！　花氏胤のバーカ！　ごゆっくりだバーカ！　ちゃんと前戯忘れんなよ！　痛い思いするのは女の子なんだからな！」

前戯て……というかごゆっくりじゃねぇだろ。

と、弓緋之のこと放置してた。

「か、かかかかいちょー！　……私たち、シちゃうんですか？」

「お前もかよ！？」

俺の大声にビクっとした弓緋之がそのままベッドに潜りこんでしまった……いや、今のは怒鳴ったわけじゃなくて、なんというかさ〇ぁ～ず的ツッコミでだな……

「ひゃう！　や、でも、かいちょーと二人きりで、しかも鍵閉められちゃいましたし……」

弓緋之が再び目元までを布団から出してこちらを窺ってくる。

「はぁ……何もしないから安心しろ。鍵も締めないとまた冴島ちゃんが騒ぐだろ。弓緋之、なんか飲むか？　奢ってやる」

鞄から財布だけ取り出す。

今月は厳しくもないし飲み物奢るくらいなら問題ないだろう。

「あれ、かいちょー、なにか落ちましたけど……って、えぇ！？」

「うん？」

足元に銀色の紙が見えた。

ん、紙じゃないな……あぁ、さっき投げられた、

「それ！　こ、ここコンドー……ぎょ、業界最薄！？　紳士の嗜み！？　ムリヤリ！？　か、かいちょー、やっぱり！？」
「あ、いや、これは……」
というかなんでそこから見える！？
……って、そういえば視力４．０とか言ってたな。
「弓緋之。一応、言っておくが……誤解だ」
「かっ」
か？
「かいちょーのヘンタイーー！！！！」
……ですよねぇ。

第四話（前書き）

旅行からただいまー
今回は三人とも登場～
&ほんのちょっぴり異変も起き始めます。

第四話

「かいちょー、戻らないんですか？」
「ん？　まぁ、要望用紙は持ってきてるからここでも仕事できるしな」
「してないじゃないですか」

……今からやろうと思ってたんだ。
というか弓緋之、癖なのかもしれないが俺と話すときに顔を隠そうとするのはやめてくれ。俺が怖いみたいじゃないか。
今だってベッドの掛け布団を引っ張って目から下は全部隠してるし……というか冷夏とはいえ羽毛布団はさすがに暑いだろ。

「まぁ、大半の要望は悪戯だしやる気がでないのも仕方ないだろ。紙だってただじゃねぇんだからな……まったく」
「でも、かいちょーは一つ一つちゃんと確認してるんですから偉いですよねぇ」
「仕事だからな……というか大人しく寝てたらどうだ？　見てて面白いものでもないだろ？」

内容を読み上げてやればなかなか面白いと思うが……例えば『我が科学部には潤いが足りない。美人の女性顧問……つまり数学の峰先生が欲しい。要求が認められなければ手作りＣ４が便座に座った瞬間に破裂するぞ』とか『プロレス研究会が部に昇格する際には是非、峰先生を顧問に！　任せたぜ、ブラザー』とか……いや、さっぱり笑えなかった。お前、不安で学校で大きい方できなくなるじゃねぇか。
それにしても峰先生も学校一の美人教師なだけあるな……なんて素直に思わせてくれない要望だ。

美人教師の人気具合よりもうちの学校の無法地帯ぶりが気になる。詳しくは知らんけどＣ４って爆弾だろ？　警察も一回うちに仕事しにこい。

それに、プロ研にはブラザーどころか知り合いすらいないし……というか小さく『無視をするなら月の無い帰り道は気をつけろ』とかありがちな脅迫文書いてんじゃねぇ。

前会長はどうやってこの無駄に戦闘力が高そうな生徒たちがいる学校を纏めてたんだ……？

生徒会は引退したとは言ってもまだ在学中だし……今度聞いてみるか。

「別につまらなくはないですよ？」

「は？」

「え、あ、いえ、変な意味ではなくてですね！」

また、いつものようにわたわたと慌て始める弓緋之。はっきりしない奴は苦手なんだけど不思議とこいつだとイライラしないのは何でだ？

……慣れか。

「や、えっと、なんていうか生徒会の仕事をこなしているかいちょーは楽しそうですから……」

「そうか？」

まぁ、確かにツッコミどころが多すぎて退屈はしないが……ストレスは溜まるぞ？

「この学校が好きなんだなーというのが見ててよく分かります」

「……恥ずかしいこと言うな。怪我人は大人しく寝てろ」

「いえ、それって普通は病人では……というか湿布さえ貼れればい

いんですけど……」

シップ？　ああ……そういえば尻打って動けなくなったから連れてきたんだったか。

それなら早いとこ湿布を貼ってやって授業に戻らせないとな……

「俺以外の生徒会役員がサボるのは許されてないし……」

「いえ、かいちょーも授業に出ないとダメです」

「仕事がなくなったらなー。よし！　俺が湿布貼ってやるから弓緋之は早く授業に戻れ」

「あ、はい……って、ええ！？　か、かいちょーが貼るんですか！？」

「え？」

「だ、だって、お尻……ですよ？」

そりゃ、怪我人が自分で貼るのは難しいだろうし、尻ならなおさら……尻！？

いや、違うぞ。

俺、クールになるんだ。一は素数じゃない。素数を数えるんだ。

二、四、六、八……って偶数だよ！

「……かいちょー？」

「ほら、湿布。カーテン閉めて自分で貼れ」

「は、はい……」

弓緋之が湿布をしっかりと受け取ったのを確認してから、ベッドの周りを囲むようにして設置されているカーテンを閉じる。

さて、残りの要望も片付けるかな。

なになに……

「弓緋之のスリーサイズを教えろ。教えなかったら二度と校庭の土を踏めない体にしてやるぞ……？」
「かっ、かいちょー！？　そ、そんな、いきなりなんですかっ！？」

またストレートな要望……というか欲望だな。
しかし、うちには脅迫ブームでもきてるのか？　既に三人に命狙われてるぞ。
それにしてもこんなことを書いてくる奴、誰なんだよ……匿名じゃないから誰からかはわかるが……えっと、要望用紙には……

「う、上から９１・５４・７９……ですけど」
「一年の仮面紳士より……いいセンスだ……ってスマン、弓緋之なんか言ったか？」

がたぁん！

「きゃっ！？」
「お？　弓緋之どうした？　大丈夫か？」
「や、いえ、なんでもないです……勘違いで……で、でも聞いてなかったみたいだし……」
「？」

てか、一枚ずつ見るのはさすがに効率悪いな。適当な数並べて一気に確認するか。

「えーまずは……弓緋之の……」
「はい？」

下着の色？
はい、却下。今日は黒だがな。

二枚連続とは……弓緋之が人気だってのは本当みたいだな。

「トイレでの……」

「はい」

無駄話を禁止にしてください？

うん、珍しくまともな要望だな……とりあえず会議行き、と。

「写真を……」

「しゃ、写真！？」

現像する暗室を作れ？

写真部のやつらか……ご丁寧に脅迫までしてきてやがる……却下。

脅迫してこなければ考えてやるのに。

次は……美術室の蛍光灯が切れているので交換して、

「ください……まぁ、まともな要望だな」

「まともじゃないです！　というか私のトイレの写真をくださいって……か、か、かいちょー、それって私がその……使ってる時の写真ってことですか！？」

うお、びっくりした！？

いきなりなんだ……って、

「弓緋之？　湿布貼れたのか？」

でも湿布貼ったからって、そんな急にベッドから立ち上がると危ないと思うが……というか何をそんなに慌ててるのかが分からない。

「え？　あ、はい……貼れましたけど……じゃなくて、さっきみた

いな要望出した人にはなにかしらの注意が必要だと思うんですけど！？」

ずずいと顔を近づけてくる弓緋之に気圧されつつ何の話をしているのかを考える。

さっきみたいな要望……っていうのは脅迫付きの要望だよな。

確かに本気ではないとは思うがこれ以上悪ふざけをする生徒が増えても困るよな。だが、相手の名前が分からない場合のほうが多いから犯人を探し出すのはちょっと大変だぞ……となると、

「やる奴はやるから諦めるしかないだろ。当人の良識に期待するしかない」

「えぇ！？　だ、だって、私の……というか完全に犯罪じゃないですかぁ！　そんな……や、やる人が分からないからなんて……か、かいちょーは、私が嫌な思いしても仕方ないって言うんですか……？」

え？

なんで涙目なんだ？

いや、脅迫されてるのは俺だけだし、わざわざ弓緋之が嫌な思いしなくても……俺のことを気にしてくれてるのかもしれないが、たがが冗談だしなぁ。

それに本気だったとしても多少なら荒事にも対応できるだろうし……いや、写真部以外は無理そうだな。爆弾とかプロ研とか相手にできるわけがない。

秡魔師って言っても体は普通の人間なんだよ。いや、俺と未咲は少し違うか。

「まぁ、実際に問題が起きたら、」

「なにかが起きてからじゃ遅いんですよぉ！　そんなことが起きた

ら……私、学校に来れなくなっちゃいます……写真で脅迫されて体育館の裏で無理矢理……ぐすっ」

いや、仮に俺が襲われてちょっとした怪我をしたとしても弓緋之がそこまで気にすることはないぞ？

……いや、この剣幕は違うか。弓緋之は生徒会の関係者全員が巻き込まれるかもしれないって思ってるんだな……？

確かにそれなら必死になるのも頷ける。

「弓緋之、少し落ち着け」

「……はい」

「仮に一度起きたとしても、二度目は絶対に起こさせない。だからあんまり気にするな。お前のことも守ってやらんこともないし」

「かいちょ……」

俺や弓緋之が本当に襲われたら……まぁ、やりようはいくらでもある。

未咲も怒ってくれるだろうし、ここら辺の悪魔も協力してくれるだろ。

そう考えると俺達に牙を向いて生き残れる奴なんて人間やめたようなやつらだけみたいだな。俺が何もせずとも万事解決だ。友達は多いにこしたことはないな。

「だから一回起きたら遅いんですよ！　デ、データとか残ってたらいくらでも……！　もぉ！　か、かいちょーのバカぁ！　出てってくださいぃぃ！」

「お、お、お？　ちょ、押すなって！」

「ヤです！　かいちょーなんて嫌いです！　かいちょーのばか！」

……おかしい。

俺はお前たちは守ってやるってことを伝えたはずなんだけどな。
思い返してみても誤解の余地なんてないし……
弓緋之にぐいぐい押されながら考えていたら目の前で扉が開いた。
ん？　鍵は閉めたはずだから冴島ちゃんが鍵もって戻ってきたか？
そう考えて視線を下ろして見えたのはスカートの裾。
……むむ？　この脚は見たことあるぞ。

「……未咲か？」
「兄様、どうして顔も見ずに判断できたんですか？」

そりゃあ、未咲の脚は見慣れてるからな。別に腕でもうなじでも多分わかるぞ。
というか未咲が来たってことは一時間目終わったのか。未咲は偉いから絶対に授業はサボらないからな。未咲がいい子でお兄ちゃんは嬉しいぞ。

「まぁ、そんなことはどうでもいいのですが……というより、ココ、どうしたんですか？」
「ふぇ、未咲ちゃぁん……」
「ん、ああ、なんか急に泣き出してな……」
「……ココ、兄様を借りますね？」
「おぉ！？」

急に未咲に腕を掴まれて廊下に放り出された。人間の腕が耐えられないような銃の反動に耐えられる腕力で、だ。
そして弓緋之だけを取り残して扉が閉められる。
俺は俺で保健室の扉がある方とは反対側の壁にぶつかりそうになったがなんとか止まれた……危なかったな。俺がドジって転んで怪我なんてしたら未咲が気に病んでしまう……昔から自分の特異な体質を嫌ってたし……

「一応聞くけど……ココに何かしたの？」
「いや思い当たることは何も……でも同じ女の子の未咲にならなにか分かるかもな」

周りに誰もいないからか未咲が家での会話と同じような砕けた口調で聞いてきた。
……男の俺には分からなくても無神経なことを言っていた可能性はある。そう考えて、できる限り状況を思い出して未咲に伝える。
むむむ、改めて整理しても弓緋之が泣いた原因が分からないな。

「……ふぅん。じゃあ、なにか、その、え、えっちなことはしなかった？」
「いや、してな……くもないかも……」
「えっ」

少し意外そうな顔をする未咲……ごめんな未咲……お前が信じるに値するような紳士なお兄ちゃんじゃなくて……俺だってわざとじゃなかったが……そんなの言い訳だよな。
まぁ、弓緋之が胸を見せようとしてきたりコンドームを落としたのはやっぱり俺の責任ではないと思うが、尻に湿布貼ってやるなんて言ったのはさすがに俺の落ち度だ。
でも兄である俺が自分の罪を認めなかったら未咲が余計に恥ずかしいと思うから正直に言わないとな……

「こ、コンドーム……」
「あ、やっぱり事故でも不味かったか？」
「う、ううん！　いざというときに備えておくのはいい心掛けだけど！　……って妹になに言わせるの！　じゃなくて、ココの勘違いかも」

「え？」
「兄さんは教室に戻って！　生徒会長だからって見逃さないからね！」
未咲は俺にびしぃっと左手の人差し指を突きつけて保健室の中に戻っていった。
……未咲に言われたら仕方ないな。
それに、あんまりウェルミを独りにすると不安になるかもしれないし、仕事は教室に戻ってやるか。
「……あ、要望の紙、保健室の中じゃん」
まぁ、未咲か弓緋之が持ってきてくれるだろうな。
とにかく教室に戻るか。
未咲に言われた以上、二時間目に遅れるわけにはいかないからな。

■□■

「ココ、兄様がなにかしましたか？」
「ううん……ただ、写真が。うぅ……」
「写真？」
「かいちょー……私がトイレで盗撮されても、どうしようもないから諦めろって……」
「盗撮？」
写真とか盗撮とか……どう考えても犯罪なんだけど、いきなりなに？
というか兄さんもなんだかんだで優しいから、そんな最初から突き放すようなこと言わないと思うけど……人の機微に疎いところはあるけど、人が困ってるのに気付いたら放っとけない人だから。

まぁ、そんなこと考えなくても二人の会話が噛み合わなかっただけってのは今までの経験から予想できる。
この二人、いつもどこかの歯車がずれてるから……それなのに近くにいて嫌にならないってのも珍しいけど。
ただ、問題はどういう風に勘違いが起きたのか……かな。

「ココ、そもそもの始まりは何？」
「ぐすっ……かいちょーが、変な要望をまともだって言い出したから」

要望というのがなんのことか分からなかったけれど、きっと机の上に置いてある書類の束だと予想する。
変な要望ね……脅迫混じりだったり冗談にしか思えない内容ばっかり。ちょっと文頭を読んだだけで選別できそう。
見た感じではココが泣き出すような内容は書かれてないんだけど……盗撮なんてどこにも書いてないし……

「兄様はなんて？」
「えと、私の、トイレでの写真をくださいって……」
「はい？」

……兄さんがそんなこと言うはずがないんだけど。
もちろん私にも言わないけど……私以外の女の子に興味を持つ兄さんってのも想像しにくい……かな？
いやいやいやいや！
あのシスコンを矯正しなきゃいけない私がそんなこと考えてちゃダメでしょ！　だいたい兄さんは生徒からの要望を読み上げただけだし！
……とにかくいつも通り誤解を解かないと……ココは兄さんのシスコンを直すために必要だから。

というか、ここまで可愛い娘と二人きりになってもなにも意識しない兄さんはやっぱりおかしい。

「まぁ、とりあえずその要望の紙を探すことからですかね……」

とはいえ、机の上にあるだけの紙にはココが言ったようなことが書かれているものは無い。

机の脇にあるゴミ箱の中にも何枚か却下されただろう要望が捨てられてるけど……やっぱりない。

……あれ？

「弓緋之の下着の色を教えてくれ」

「み、未咲ちゃん？　いきなり言葉遣いが男の子みたいに……じゃなくて、えと、今日は黒……かな？」

名前は……赤西賢太？

たしか、兄さんのクラスの一瞬イケメンに見えるチャラい人……

いや、重要なのはそこじゃなくて、さっきも確か……

「写真を現像する暗室をつくれ……」

やっぱり。

それに、机の上の方には……

「美術室の蛍光灯が切れてるので交換してください……トイレでの無駄話を禁止にしてください……なるほど」

多分、兄さんは全く意識しないで文面を呟いてたのかな。

並び変えて一部分を抜き出せば弓緋之のトイレでの写真を交換してください……

「はぁ……まったく、よくもここまで器用に……」
「未咲ちゃん？　何か分かったの？」
「ほら、これです」
「え？　えっと……あれ？」

４枚の紙の抜き出す部分に丸を付けて順番に渡していく。
最初は要領を得ないような顔をしていたココがだんだんと、そして確実に慌てだす。
この子、怒ったりテンパったりすると強気になるから……多分、兄さんに言ったことを後悔してるんじゃないかな。
兄さんはそういうのあんまり気にしないからココも気にしなくていいと思うけど……

「み、未咲ちゃ～ん……私、かいちょーに謝らないとぉ……！」
「今日、放課後生徒会あるんでしょう？　その時に謝ればいいと思います……ついでにそろそろ授業始まるけど……私の前でサボるつもりですか？」

それなら風紀委員副長としてお仕置きしなきゃいけないんだけど……？
あぁ、兄さんはいいんです。言っても聞かないし、言っても喜ぶし、お仕置きしても喜ぶから……！
……本当に、兄さんのことはどうにかしないといけないかも。

■□■

キーンコーン

……ヤバい！

二時間目の始業チャイムを聞いて歩きを猛ダッシュに変える。
未咲が俺に対して二時間目に出てと言ったのだから……可愛い妹の期待を裏切る兄なんて兄の風上にも……いや、風下にも置いてやらん。
だから俺は走る。それはもうメロス並みに走る。
教室までは残り１０メートル。残りタイムはラストの『コーン』の分だけ……！
間に合うか？
いいや……間に合わせる！

ガタァンッ！

「よっしゃぁ、間に合ったぁ！　俺、間に合いましたよね、先生！？」
「は、花氏（はなうじ）クン？」

教師はぐるぐるビン底メガネをかけた……えっと、通称おさげ女史！
確か授業は丁寧で分かりやすいけど夏休みの宿題が少なかったことを教務主任に叱られたオドオド系すッぴん女子のはず……女子じゃないけど。ということは今は化学の授業か。
というか、若干間に合わなかったような気もするが……ならば押し切るまでよ！

「先生！　俺、遅れてませんよね！？」
「は、花氏クン、どうしちゃったの？　私の記憶では、花氏クンは授業に１０分くらい遅れたって気にしないような生徒だと思っていたのだけど……生徒会長職ってそんなに大変なの？」
「なんだかいきなり先生の授業を完全に受けたくなったんです！　あぁ化学！　人間の英知の結晶！　素晴らしいじゃないですか！

そんな化学を真面目に学びたくなったのですよ！」
「そ、そうですか……まぁ、チャイムの鳴り終わりと同時に教室に入ってこれたので間に合っていたと思いますよ？」

よしっ！
押し切った！

「ですが、今は生物の授業ですよ？」
「……なん、だと……！？」

俺が愕然とした声を出した瞬間、教室が爆笑に包まれる。
いやいや、そんな笑うことないだろ……まったく、たまに授業に出れないのは生徒会の仕事のためなんだからな！

「つまり、お前たちがそうやって笑ってられるのも、全部、俺のお陰なんだぞ！」
「や、花氏って生徒会長になってからまだ二週間しか経ってないっしょ。二学期からなんだから」
「……まぁ、細かいことは気にするな」

俺達が通う城南高校第一普通科では、生徒会長は前生徒会長からの指名制。だから俺が生徒会に入ったのも前会長の任期が終わった夏休み後からだ。
生徒会外から生徒会長が選ばれるのは珍しいことらしいが……指名制に例外はないらしく俺は生徒会長に仕立てられていた。嫌というわけではないが微妙に微妙な気分になるのは仕方ないと思う。
まぁ、なぜか生徒会長というだけで結構なことが許されるようになったから助かるが。
学校運営のための仕事の一部だからって単位とるための必要出席日数を三割も減らすってのも本末転倒だ。

「えと、花氏クン？　そろそろ席に座ってもらえるかなー……って、思うんだけど……？」
「え？　あぁ、はい」

いかんいかん。
考え事は席に座ってからにしよう。

「んぁ……タネ君だぁ……おかえりー」
「ウェルミ……初日の、それも実質最初の授業から居眠りする気か？　……退学になったら下手すると魔界に強制送還だぞ？」
「それは困るなー……でも、なんだか疲れちゃって……えへへ」

疲れたというような声を出していながらもウェルミの顔はしあわせそうに緩んでいる。
……俺が教室から出てってからずいぶん質問攻めにされたみたいだな。楽しかった反面、疲れもした……というところだろう。
それに昨夜もなかなか寝付けなかったみたいだし、平気な顔をして実は疲れがたまっていたのかもしれない。学校が楽しみで眠れないなんて子供か。

「タネくーん。教科書貸して？」
「ん？」

あぁ、まだ受け取ってないのか……転入手続きも結構慌ただしかったみたいだしな。

「あ、ハナちゃん教科書まだなん？　じゃあ俺の見せてあげるから、」
「ううん。タネ君に見せてもらうから……でも、ありがと」

「そっかー、残念」
おい……俺はまだ見せてやるなんて一言も……まぁ、いいけどな。
「ほら、使えよ……俺は寝るか」
少し離れたウェルミの机の上に教科書を放る。
これで授業中に寝る大義名分もできたし……
「ダメだよ！」
「いや、声でかいぞ」
いきなり大声を出した――とは言っても教師に聞こえてしまう程度の声だが――ウェルミ教室中が注目する……俺まで巻き込まれてるぞ。
そして、そんな周りからの視線に気付いたウェルミがわざわざ立ち上がって謝ってから着席、俺に恨みがましそうな目を向けてくる。
いや、今のは俺のせいではなかった気がするぞ？
理不尽だ。
「じゅ、授業は真面目に受けないと……」
「とは言ってもなぁ……」
正直、授業は受けなくても問題ないしな。
自分、天才ですから。
学期末試験も学年トップだったんだぜ！
「ということで俺は……ん？」
寝る、と言おうとしてウェルミを見ると俺のことを睨みながら膨

れっ面。そして涙目。
え、意味が分からない。
俺に意図が通じていないことに気付いたウェルミがさらに膨れながらビシィッとある一点を指差す。
そこにはちょうどウェルミと同じように教科書を持っていない男子が隣の男子と席をくっつけて二人して教科書を覗き込んでいる光景があった。
あいつら顔近付けすぎだろ。ホモだキモーい！　とか女の子に言われちゃっても知らないぞ？

「というかウェルミ、初めて会ったときにも言ったはずだけど俺はホモじゃないからな？」
「そうじゃなくてぇ……もぅいいよぉ……」

そのままウェルミが拗ねて廊下の方を向いてしまった。
喧嘩のようにも見える俺たち二人の様子を周りの生徒たちが気にしているのが分かる。
……お節介どもめ……仕方ない。
これから自分のすることに対しての照れ臭さをどうにかしようと頭を掻きながら、

「タネ君、頭痒いの？　お風呂入った？」
「入ったしちげぇよ！　……机、付けるぞ」
「えっ？」
「だから……俺が教科書見えないから、机」
「あっ……うん！」

一瞬でウェルミの顔が喜色満面になる。
いやそんな喜ぶなよ。犬じゃあるまいし……高校生なんだしクールにいこうぜ？　……そこの双子、ニヤニヤしてるんじゃない！

本当に俺は教科書なんて必要ないんだからな……それに俺は未咲を護らなきゃいけないから他に意識を向けるわけにはいかないんだって。

ちょんちょん

ん？

「た、タネ君……ここでは生物と一緒に外国語も勉強するの……？」
「アホ、日本語だよ」
「どうしよう！　先生の話してる内容が意味分からないよ！？」

……ウェルミ、意外と頭弱い子なんだな。いや、本人の能天気さから考えると意外でもなんでもないんだが……

それでも悪魔は古来より天文学や数学などの知識を人間に授けるものとされていた。だからこそ悪魔と関わっていたなんていう与太話が多いのだ。

それぞれ天文学や植物学などの得意分野があるとはいえ、そうではない学問が不得意ということもない。だから生物を苦手な悪魔ってのも珍しいような……しかもミドルネームを持ってる奴なんだから教養もそれなりにあるはず……

そんな俺の疑問は他ならぬウェルミによって解決された。

「私、実は末っ子で勉強できなくても許されてたから……あはは。お父さんの跡継ぎも決まってたしね」
「ほー……でも、魔法を使うのには知識も必要なんだろ？」

ウェルミの得意魔法は氷結。

生物は関係無いかもしれないが、永久凍土（フクティオニス）という第二級称号の内のひとつを名乗ることが許されるだけの魔法を使うには、やはりそ

れなりの知識が必要なはずだ。

「それが、私って感覚だけで魔法使ってるから……第二級なんてもらえたのも、精密な操作ができたからなんだ」

少し恥ずかしそうにウェルミが笑う。

「魔法も構成要素は魔術と同じなのか」

「そなの？」

魔術師のレベルを測るときに重要視されるのは機関にもよるが大抵が三項目に纏められる。

本来、悪魔やそれに類するものが使う魔法を人間でも使えるようにした魔術がそうなのだから、魔法がそうではないということもないだろう。

ひとつは誰もが最初に思い浮かべるであろう威力の高さ。

これはどれだけ精神力を魔力へと効率よく変換できるかが大事になってくる。もちろん純粋な霊的存在である悪魔の方が適正が高いのは言うまでもない。

二つ目はウェルミの言う精密さ。

同じ火の玉を打ち出すという行為でも、使用者の器用さによって追尾性を持たせたりすることもできる。

そして最後に応用性だ。

ひとつの魔法、魔術でどれだけ多くのことをできるか……というところだろうか。俺が使える秡魔術は応用性の低い魔術に分類されるため俺自身、この辺りへの理解は薄い。

「にしても感覚だけで魔法使えるなんて便利な奴だな」

俺は秡魔術を覚えるために結構広範囲な知識と経験が必要だった

ぞ？

「やっぱ、悪魔の方が魔法の適正は高いのか？」

「……」

「ん？」

「くー……」

寝てるし……

初日の、それも実質最初の授業で寝るとか度胸ありすぎじゃないか？

普通、初日でドキドキするとか、勉強ついていけないならハラハラするとか……寝る以外にするべき反応が色々あるだろう。

ぽふ

……しかも、人によっかかるとか。

「ふぁ……ねむ……」

第五話（前書き）

時間がある時に纏めて改訂しますよー

今回は妹回

第五話

ふむ……結局、昼休みまで寝てしまった。まぁ、未咲は授業に出ろとしか言ってないしいいかな。

ウェルミに至っては未だに寝てるし、クラスの奴らも生暖かい目でニヤニヤと俺達を見ている……逆の立場なら俺も同じような反応をするから怒りはしない。

怒りはしないが……

「どうして、未咲がいる……？」

教壇とは反対側にある扉の前で未咲が仁王立ちしていた。

その表情は怒っているような呆れているような、しかし表面的には悪臭を放つ生ゴミを見るような目で俺を見ている……お兄ちゃん的には怒っているのを表面に出してもいいからゴミ扱いはしてほしくないかな……？

「まぁ、タネの浮気だー……って俺が言って、」

「「私達が広めといた！」」

胸を言い張って言い張る三人。

双子はいつものことだから置いといて……阿久津、なんてことをしてくれたんだ！？

「石破（いしわ）……幼馴染の責任は飼い主の責任だよな……？」

「え、私なの！？」

「飼い主って自覚はあるのか……拓也、揉みしだいていいぞ」

あんまりぱっとしない顔の阿久津をいじるよりも隠れファンクラ

ブ『ひなりんラブ会』がある程度には可愛い石破の方が見てて楽しい。
もちろん未咲の方が数倍可愛いけどな。個人的に漁船とイージス艦以上の戦力差があると思っている。
「よし、まかせろ……って未咲ちゃんいるのにできるわけないだろう？」
「……しまった」
よりによって未咲の目の前でセクハラ幇助（ほうじょ）をしてしまうなんて……！
未咲の目が段々と吊り上がっているような気がする……可愛いなぁ。
しかたない、俺が直々に制裁を……
「くー……」
ぐ……ウェルミ、いつまで人の肩に寄りかかって寝てる気だよ……これじゃ阿久津を懲らしめられないじゃないか！
というか未咲が見てる前でこういうことをだなぁ……！
「……さすが普通科史上、最も素行が悪い生徒会長である兄様のクラスですね。居眠り、セクハラ、暴力は日常茶飯事ですか」
「ぐぅっ」
冷たい視線と共に放たれた未咲の言葉がダメージを伴って俺に突き刺さる。グサリ！　こうかはばつぐんだ！
……しかも、確かに未咲に言われた通りだから反論もできない……いや、未咲の言うことが間違っていたとしても指摘する俺じゃないけどな。

未咲が白と言えば黒も白だ。パンダの模様も逆さまにしてみせよう。

「そんなことは聞いてません。とにかく兄様にはなにかしらの罰を……といっても気にする人じゃありませんし」

今度は呆れたような声ｗｉｔｈため息。

そうそう。俺は気にしないぞー！

どんなに辛いことだって未咲の言いつけなら喜んでやるし、未咲以外からの命令だったら聞かないし。

「……ということで明後日まで兄様とは口をきいてあげません」

なん……だと……？

未咲が既に吊り上がっていた切れ長の目をさらに吊り上げて俺を見つめる……もとい睨み付ける。

「わかりましたね？　仮に会話してしまった場合は……一回につき半日ずつペナルティを課します」

「そ、そんなバカな……」

「おぉ、未咲ちゃ……未咲様が本気だ！」

「さ、様？」

お調子者の拓也の声に今度は混乱し始める未咲。声まで裏返らせて……可愛いなぁ。

まぁ、いきなり未咲様なんて呼ばれて平然と受け入れられるほど俺の妹は不遜ではない。

しかし律儀に守ってるのはいいんだけど……なんだろ、俺が気安くちゃん付けするなって言ったんだが、なんかムカつく。

てでも未咲がいるから制裁を加えることもできないし……！

「ふあぁ……ん〜〜〜っ！」

お、ウェルミ、やっと起きたか！　これでようやく動ける！

「んぅ？　……！？　タネ君ごめん、ごめんね！」

俺の肩に寄りかかっていたことに気付いたウェルミが慌てて離れた。

うわ、久しぶりに重石がなくなると随分と肩が軽く感じるな。逆に軽すぎて意味もなく不安になる。

「って、あれ？　未咲ちゃんもいる……？　……なになに、ひなりん！　どういう状況？」

寝起きはいい方なのか、ウェルミは寝ぼけ眼を一擦り二擦りした後はすぐに周りの野次馬の輪に加わり出した。

それに石破がニヤニヤと嫌な笑いを隠そうともしないで一言。

「んー……未咲ちゃんがウェルミちゃんに嫉妬？」

「私に？」

「違います！　……というかそういうことを言うと、」

なんだと！？

なるほどなるほど……なんだ、そういうことなら素直に言ってくれればいいものを……

「未咲、家に帰ったら肩枕どころか腕だって膝だって貸してやるからな！　ウェルミに嫉妬する必要ないぞ？　ん？」

「な、なにを！？　調子に乗らないでくださいっ！」

「未咲ちゃん、顔真っ赤だよ？」

ウェルミの指摘で必要以上に意識してしまったのか、ただでさえ赤かった頬がさらに鮮やかに染まる。

「なってません！　と、とにかく兄さんはこれから私に話しかけちゃダメだからね！」

あー……行っちまった……ま、まぁ、冗談だよな！

今まで近所でも評判の仲良し兄妹だったんだ。こんなことで仲が悪くなんてことはない。ありえない。そう、未咲の対外的なポーズだよな！

未咲は仲がよすぎることを気にしてるみたいだし……そうに違いない。多分。

「「あーあー……花氏嫌われちゃったねぇ」」

「そ、そんなわけない！　というか草野！　お前らが広めなければ……」

「だって真昼が……」

「いや、深夜だよ！」

「というかどっちがどっちだよ！」

「「こっちが真昼！」」

二人が互いに指差しあって罪を擦り付け……って両方真昼って混乱させようとしてるだろ！

よし、こうなったら……

「ウェルミ、どっちが真昼だ？」

「……こっちがちょっと動揺した！」

「よし、じゃ動揺してない方にお仕置きだ」

「ちょ、私真昼だよ！」
「ううん、そっちが深夜であってるよ」

二人ともお互いに自分が真昼だと主張しているが割とどうでもいい。
真昼のせいにしようとしているということは真犯人は深夜なんだろう。この際その予想が間違っていても構わない。
それこそ両方とも責めたっていい気がする。

「というかそうだよな。この際両方とも疑わしきは罰するってことで……」
「「あーっ！　花氏！　ウェルミっちの歓迎パーティーやろうよ！　うん、そうしよう！」」
「は？　ちょ、そんな急に……」

双子が俺の声を二倍の声量で押し流しながら突然な提案をした。
しかし俺には生徒会のミーティングがだな……って、クラスの連中も双子の提案にのり始めてるし……
でも、歓迎パーティーか。
俺も特に反対はしないが……当のウェルミ本人がどう考えてるかだよな。
まぁ、十中八九……

「大賛成！　みんなありがとー！」
「「よっしゃ、きまりぃ！」」
「こうなると思ってたが……となると、どこでやるかが重要だよな」

俺は用事があるし門限が厳しいやつだっているだろうから学校から離れすぎても困るが、一クラス分の生徒を丸々受け入れられるキャパシティも必要となると都合のいい店はなかなかない……

だいたいコイツら全員が店に入るだけの金を持っているとは思えない。
でも気温も大分秋めいてきたし夜になると寒くて公園とかで騒ぐのは無理だろ……焚き火なんかしたら確実に怒られるだろうしな……
「タネんちでいいだろ？　リビング広いし未咲ちゃんもいるし」
「賢太、余計なこと言うな！　だいたい話してあげないって言われたばっかなのに許可とれるかよ……くそぅ」
今日を入れて二日間も未咲と話せないなんて……！
俺は何を楽しみに明日を生きればいいんだ！？
「な、泣くなよ……」
泣いてない！
……しかし、本当にどうしたもんかな。みんなは既にやる気になってるし……こうやって考えてみると何人もの生徒を受け入れられる学校ってすげぇ広いんだな……
「とはいっても放課後に教室でやるわけにはいかないしなぁ……さすがに未咲が怒るだろうし」
「……いや、案外大丈夫かもよ？　……草野姉妹、未咲ちゃんの様子を探ってきなさい。特に本当に花氏と話す気がないのかどうか！」
「「よく分からんけど了解！」」
ちょ、渡辺？
まさか本当に学校でやる気か？
確かに教室でできるなら助かるが……
「会費は一人五百円ね。ウェルミさん抜いて三十九人だから……う

わ、半端。花氏は千円出しなさい。それで二万円。これだけあれば飾りもお菓子も買えるわよね？」
「ちょ、なんで俺が！？　だいたい部活動以外での教室利用は原則禁止だろ？　未咲に怒られるのは俺、」
「仲直りの策も考えてあげるから。それに口きいてもらえないんだから怒られないでしょ」

なるほど一理ある……ん？

「それって俺が怒られるのが後回しになるだけじゃないか？」
「バレたか……って冗談。そんな怖い顔しないでよ。原則禁止なだけで生徒会と風紀と担任に許可をもらえば平気なの。歓迎会なんだから担任の方は平気だろうし、あんた生徒会長だし」

ほー……さすが我が組の諸葛亮。堅実そうな手を思い付いたな。
俺はてっきり深夜まで息を潜めてそれから騒ぐんだとばかり思ってたぞ。
まぁ、その辺りは了解したが……

「……誰が風紀委員に言いにいくんだ？」
「花氏しかいないじゃん。放課後のミーティングって風紀も一緒なんでしょ？」
「……どうなっても知らないからな」
「信用してるわ」

むぅ……渡辺め。相変わらず強引なやつだな。
これで未咲と話せない時間が延長されたら末代まで呪ってやるからな。
あ、でも、これって業務連絡なんだし……逆に考えれば未咲と話せるチャンスかもしれない！

よっし、あとは全て俺に任せろ！
今日は学校でウェルミの歓迎会だ！

「阿久津！　お前は買い出し行ってこい！」
「一人で……か？」
「もちろん」

爽やかさを意識して笑いかけてやったら阿久津は泣いた。
忘れかけてたがお前のせいで未咲が怒ったんだから当然の罰だ。
異論は認めん。
……どうせ石破と宇都美が仕方ないなーって顔で付き合ってやるだろうこともわかってるし。

「「たっだいまー！　ミサキチ超機嫌悪そうだったよ！」」
「ミサキチ言うな」

このクラスの奴らは未咲についして馴れ馴れしすぎる……まぁ、ほぼ毎日のように未咲が顔を見せに来るんだから当たり前ではあるけどな。
そうかそうか。
一瞬でもお兄ちゃんの顔を見ていたいか。未咲は可愛いなぁ。

「なるほどね……よし、花氏、未咲ちゃんが怒ってる理由はウェルミさんに嫉妬しているのか花氏と話せなくなったことなのか……どっちだと思う？」
「……俺と話せなくなったことかな」
「そっか。私はそんな妹にベッタリな兄に対してだと思うけど」
「そ、そんなことは……」

ないよな？

いや、でも未咲からしてみれば俺はなんてダメ兄貴なのだろう！
そうか、未咲は俺自身に怒ってたんだな？
それすら気付かないで俺は……ふっ、我ながら頭悪すぎるぜ。

「……勝手にいい顔してるけど、仲直りは手伝った方がいいの？
自分でできる？」
「是非に！」
「そ、なら未咲ちゃんとは話さないこと。二人とも何だかんだで仲
いいし、きっと未咲ちゃんの方が先に折れるわ。教室利用手続きも
私が……誰かにやらせるわ」

そこは私がやるわくらい言えよ。
我が組の諸葛亮は頭以外を動かす気は全くないらしい。
しかし……

「それだけ？」
「それだけ。さ、授業始まるし、花氏も今日くらいは真面目にして
みれば？」

未咲ちゃんに見直してもらえるかもよ、と言い残して渡辺は自分
の席に戻った。
……真面目にねぇ。
なーんか、真面目に授業受ける気にならないんだよなぁ。教科書
に書いてあることなんて口で説明されなくても分かるんだから、も
っと生徒が興味持ちそうなことを教師は説明するべきだ。

「それ、完全に勉強できない奴の言い訳だよな」

前の席に座る賢太が背もたれに顎を乗せるようにして俺をからか
う。

このなんちゃってイケメンめ……爽やかに笑ってるんじゃねぇ。

「こう見えて俺は成績いい方だぞ？」

「一夜漬けだろ？」

うっさい。

一夜漬けとか簡単に言うが教師にゴマすって範囲教えてもらったり色々コツがいるんだからな？

場合によっては職員室で問題を盗み見たりな。

「それは完全に不正だ」

「そんな細かいこと気にするな」

ようは点がとれればいいんだよ。

ほら、チャイムもなるし席ついてろ。

「……って、昼飯食ってねぇ……寝るか」

「く～……すぴ～……」

「ウェルミ、お前まだ寝るのかよ……」

まぁ、さっきと違って机に突っ伏してるだけまだましだが。

……寝てる奴らが固まってると目立つんだよなぁ……

「未咲か見直してくれる……ねぇ」

■□■

「えーと、皆、集まってるか？　皆っつっても七人だが」

会議室の無駄にでかい机を中心に座っているのはたったの七人。

生徒会から三人と風紀委員から四人だ。その内三人はもちろん俺と未咲と弓緋之。あとは知らん。だって全員集まるのって初めてだし。

「あの、その前にかいちょー、今朝はすいませんでした……」
「ん？　……よく分からんけど俺が覚えてないんだから気にするな」

というか弓緋之に謝ることはあったかもしれないが謝られる覚えはないぞ。

で、どうして弓緋之は半泣きで未咲に抱き付く。そして未咲も抱き締め返すんだ？

うぬぅ……俺も未咲と抱き合いたいが……渡辺は未咲と話さない方が、それどころか興味を向けることすらしない方がいいって言われたしな。

諸葛亮……もとい渡辺はあれで頼れる奴だし信じてみようと思う。

「……」

……未咲が俺のことを見てる気がするけど無視だ無視！

未咲、すまん！

「で、今日の議題ってなんだ？　弓緋之、書類かなにか貰ってるか？」
「いえ……」
「それなら僕が説明しましょう。会長の代わりに聞いてきました」

少しなよっちい体格のメガネ男子がスッと立ち上がった。

うむ……君は生徒会副会長だな。

メガネがキランとしたからキラン君だ。

「キラン君。頼んだ」
「はい！　……今日の議題、というより目的はこれから一年間共に協力していくことになる生徒会と風紀委員との顔合わせということです」

キラン君、名前にツッコミ入れないままだな……真面目なガリベン君かと思いきや結構ノリがいい少年なのかもしれない。
さすが俺の生徒会の役員だ。一癖も二癖もある奴ばかりだな……良いことか悪いことかはこの際気にしないことにしよう。

「それと、時間が余れば来月の体育祭のことも……と言っていましたが協力が必要なこともあまり無く、なにより面倒そうなのでやらなくても問題ないでしょう。少なくとも僕はやりたくないです」
「うん。俺もキラン君の後回し作戦（プラン・β）に賛成するが……風紀委員の面々はどうだ？　とりあえず委員長から順に頼む」
「……風紀委員長の一二三四郎（ひふみしろう）だ。生徒会長が議題を知らなかったり、副会長がよりによって会議を面倒だと言ったり……思うに君たちはふざけているのかな？」

……ふざけているのは委員長の名前だと思うぞ。なぁ弓緋之？

（え！？　あの、ふふっ……わ、私に振らないでくださいよ！）

……いや、すまん。確かにふざけているのは委員長の両親だな。よりによって四郎はないだろう。いからなんでも委員長がかわいそ……待てよ？　もしかして委員長の兄弟は全員数字の名前なのか……？
親父かお袋か知らないが名前をつけた方、もはや呆れを通り越して尊敬するぞ。

「それで、委員長はどうしたいんだ？」
「当然！　先生方から期待されている以上のことをこなしたい！　つまり体育祭の打ち合わせもできるところまで進めようじゃないか」
「あれ体育祭って、かいちょ、」
「弓緋之、静かに。えっと、次はみさ……風紀委員の副長はどうだ？」
「！？」

あえて名前は呼ばない。その事に対してした弓緋之が過剰に驚いているがそれもスルーだ。
生徒会のナンバーツーが普通に副会長なのに対し、風紀委員では副長というのは昔からの決まりらしい。少々混乱はするものの困ることはないからという理由で変えていないんだとか。
生徒会も副長にしようかな。かっこいいし。いや、むしろ俺がスクールマスターで二番手はサブマスターでどうだろう？
……うん、強そうだ。

「……副長？」
「へ？　あ、私ですね……すみません。私は……めんどくさいからという理由からではなくて急ぐ必要はないと思います」
「……なぜだね？」

イライラしているのを隠そうともせず一二三四郎（ナンバーズ）君が未咲を睨む。
おいこらお前、どうでもいいが未咲をいじめたら殴る蹴るなどの暴行を加えるぞ？

「体育祭で必要なのは各種目の定員の設定や点数、さらに一種目当たりにかかる時間を試算することのはずですが、この会議中にできるとは思えません」

未咲の言う通りだな。
点数も時間も種目当たりの定員を決めないとどうにもできない。そしてそれが決まらないとタイムスケジュールも予算も出せない、ということだ。
と、そこで弓緋之が俺にそっと耳打ちしてきた。未咲の前でこういうのは困るけど今回は特例だ。

（かいちょー、定員の設定も時間の試算も点数の目安もこの前やってませんでしたか？）
（うん、やったぞ？）
（……なら、なんで言わないんですか？）

いや、だってなぁ？
不真面目の代名詞だと思われてる俺が既に終わらせました、なんて言っても納得されないだろうし、それなら次回に生徒会で計算してみましたって言った方がましだろ。なによりそれなら生徒会全員が認められるしな。
そんな感じのことを弓緋之に伝えたらどうやら感動されてしまったようだ。一部は弓緋之にやらせてたんだが気付かなかったのか？

（それは理解しましたけど……なんで未咲ちゃんに冷たくしてるんですか？）
（いや、罰として会話しちゃいけないだけだ）
（未咲ちゃんが、ですか？）
（いや、俺がに決まってるだろ？）

なんで逆だと勘違いするのかがわからん。
俺は未咲に罰を与えられるほどいいお兄ちゃんじゃないからな。
未咲が間違ったことしても俺がフォローすればいい話だし、実際、これまで一度も未咲を叱ったことがない……まぁ、叱るべきことも

あんまり無いからだけどな。

「じゃあ書記君は？」

「じ、自分はみ、未咲と同じ考えっす！」

……野郎。

（未咲を呼び捨てだと？　調子に乗りやがって……）

（ひぃぃぃ！？　か、かいちょー、佐本君も未咲ちゃんが好きなだけで悪気は、）

なるほど、そうかそうか。

彼は佐本君というのか。まぁ、未咲に惚れるとは分かっている奴だと言わざるを得ないな。

そういうことなら仕方ないな。

「書記君、何組？」

「さ、三組です！」

一年三組の佐本だな……

（よし殺そう）

（だめですーー！）

俺より未咲のことを好きでもないくせに未咲のこと好きとか言ってるんじゃないって話だ。

俺より未咲のことを大事にできるやつにしか未咲は渡さないからな。

（それって不可能に近いですよね）

（なら未咲はずっと俺の妹だ）
（あんまりベタベタしてると嫌われちゃいますよ？）

そ、そんなことは……ないはずだ！
兄妹の絆は恋人よりも固いはずだ！

「で、えっと最後の……君は？」

最後に影の薄い子に水を向ける。
どうやら未咲と弓緋之以外は俺が声をかけるまで気付かなかったようで驚いていた。

「えっと……私は……皆が納得できて楽しめるのが……一番だと思います……」

ようするに好きにしろってことだな。

「そーだな。ただ声小さいから今度からはっきりしゃべれよ。じゃ、体育祭のことは話し合わずにこれで解散？」
「待ちたまえ！　確かに僕の言ったできるところまで終わらせるというのは少数だったが、君たちの面倒だからやりたくないというのは副長の意見と同数だろう！」

む……言われてみれば確かにそうだな。
そうなると……

「そっちの子は全員が納得できる意見って言っていたわけだから……メンドイ二人、頑張る二人で……弓緋之おめでとう、お前が最後の一人だ」
「えぇ！？」

「弓緋之君といったね？　君は真面目で優秀な生徒と聞いている。もちろんこの場合はやるのが正しいと思ってくれるだろう？」
「か、かいちょー……」
「好きに答えろ」

とは言ってもウェルミの歓迎会があるしなぁ……渡辺のやつも上手く教室確保できたみたいだし行かないわけにもいかないだろう。
夜の学校で騒ぐのとか少し楽しみだしな。

「わ、私はこのまま帰っても問題ないんじゃないかなーって思います……えへ」

困ったように笑いながら弓緋之はそう言った。
これで面倒票が一票多いから俺らの案で決定！

「よーし、帰るぞ！」
「な、なんということだ……優秀な弓緋之君までこの男に影響されているだなんて……！」
「いやそういうんじゃないですけど……そもそも終わってますし」

風紀委員側には聞こえないような声で弓緋之が呟く。
もし、弓緋之の呟きが委員長に聞こえていたら仕事は俺たちよりできると考えていそうな彼のプライドを砕いていたかもしれない。
悪いことは言わないから競うなら仕事より勉強にしてくれ。勉強ならいつでも負けてやるから。

「あ、そーだ、委員長」
「なんだ……敗者である僕を嘲笑うのか？」
「いや、意味分からんから。そうじゃなくて、教室貸し出し許可してくれてありがとな」

「……正当な理由があれば却下するわけがないだろう」

歓迎会だからパーティーなんだが……まぁ、これで歓迎会も開けるわけだしあとは教室に戻るだけだな。

……そうだ、未咲に晩飯いらないって伝えないとな……しかし会話は厳禁となると……

「あー……ちなみにこれは独り言だが、今日の晩飯は外で食って帰るからなー」

「！　兄さ……ココ、今日うちに晩御飯食べに来ない？」

「うーん……今日はお父さんと食べることになってるから……ごめんね？」

「そっか、別に気にしないで。自分の分だけ作るのが面倒なだけだから」

……今日は未咲一人で晩飯か。

う、うーむ……すごく心配だ。知らない人についてっちゃ駄目だぞ？　戸締まりもしっかりな？　早く寝るんだぞ？　寂しいからって泣かないでくれ、というか寂しかったら呼んでくれよ？

……今日は早めに帰ろうかな。

あ、ウェルミが主賓だから俺も最後まで残らないとダメか。あいつには早く家までの道を覚えてもらわないと。

「あのっ！」

俺が会議室を後にしようと扉を開いた瞬間、未咲が声をあげた。

ま、まさか俺に反応させてペナルティを発生させようっていう罠か！？

「えと、その、独り言ですが……今日は兄様の好きなシチューを作

ろうかなと思っています……いつもの癖でちょっと多目に作りすぎちゃうかもしれません」

……可愛いやつめ。

「パーティーとかって結構食いっぱぐれるんだよなぁ。家に食うもん残ってたら助かるかもな。もちろん独り言だ」

「かいちょー、大きな独り言ですね？」

弓緋之以外の事情を知らない奴らが変なものを見るような目で俺たちを見てるけど気にしない。

未咲がちょっとでも喜んでいれば他はどうだっていいからな。

第六話

さて、会議も終わったことだし早くウェルミの歓迎パーティに行かないと。未咲がシチューを多めに作ってくれるとは言っても食いっぱぐれていい理由にはならない。

……というのも料理研に頼んでごちそうを用意させるなんて話を耳にしたからなんだが……いや、未咲の料理以上にうまい料理なんて存在しないが、未咲にいくつか料理を持ち帰ってやりたいからな。

未咲は一人だと少ししか食べないから俺たちが家に帰ってからもう一回夕飯になりそうだ。

そんな寂しがり屋な未咲も可愛い……こんなことを言うと未咲は寂しがってませんって強がって、それがまた超可愛いから……それが俺的幸せスパイラル。

さて、楽しむとするかな。

「よーし、待たせたな！」

「「待ってないし」」

入って早々双子の草野真昼（まひる）と深夜（みや）に否定された。

「……そう言うなよ草野。頑張って働いてきたんだぞ？」

……うん、働いた。

最後に一二三四郎（ナンバーズ）君に次から休んでていいと認められるくらいには頑張ってたはずだ。

「「……そのまま生徒会室で仕事してればいいのに」」

「なに……？　よーし、そこまで言うなら勝負だ！」

「「よーし受けた！　……なにで？」」

「炭酸一気飲み」
「「パス！」」
ですよねー。
「じゃ俺の勝ちってことでお前らは一発芸かましてこい」
「「任された！」」
……負けでいいのか？
双子だから周りから注目されることには慣れているのか、二人はこういう大勢から見られることには慣れているらしい。
なんだかんだで毎回クラスを盛り上げている。
……一方で盛り上げるは盛り上げるけど自分で台無しにする奴もいるが。
「出席番号三番！　阿久津亮改めＭｒ．アツック、マジックやります！」
……アクッツじゃないのはアツックの方が本物とカタカナの形が似ているかららしい。
マジックショーの前座なんかをやったこともあるらしくカードマジックに始まり、シルクハットから鳩を出したりと腕前はなかなかなのだが……
「これで最後、馬を出します！」
問題はこれだ。
既にいくつかプロ級のマジックを見せて会場を盛り上げたんだからそれで満足すればいいのに蛇足としか言い様のないネタをやるんだ。

「はぁっ！　あれ、鳩が出ちゃった……ほっ！　今度は花が！」

こんな感じに失敗しているていで細かくマジックを織り混ぜるのは構わない。むしろ個人的にはこういうのも好きだし、クラスも盛り上がっている……ただ、

「ちょっと、机の中を探してみる！」

そう言って阿久津は教卓の影にしゃがみこみ……

「ヒヒィィン！！！」

「「「「「……」」」」」

自らが馬の覆面を被って立ち上がった。

会場の空気は一気に氷点下だ。

……始めてやったときはその突拍子のない方向転換と馬のアホ面に皆が笑ったのだが……四回も五回も繰り返されれば流石に飽きる。

「あ、あれ？　ひひーん！」

教室の空気が冷めきっていることを肌で感じとったのか二度目の嘶（いなな）きは控えめだった。

いつものことなんだから阿久津もいい加減そろそろ学んでもいい頃だと思うんだが……

「「おらー！　どけどけー！」」

そんな感じに完全にすべって立ち尽くしていた阿久津が双子によって教室から蹴り出された。

うわーなんて悲鳴をあげながらも少し助かったような顔をしている……まぁ、蹴り出されることで少しは笑いをとれていたからな。

「今回はー！」
「なんとー！」
「「新ネタ仕入れてきたよー！」」

阿久津のマジックなど無かったかのように堂々と振る舞う草野。
……新ネタか。
毎度ながら会場を盛り上げられるだけのネタをよく思い付くよな。
未だにこの二人がすべったところを見たことないぞ。

「「まずは……」」

さて、皆が双子に注目している間に料理の方をタッパーに詰めてしまおう……双子の新ネタも気になるが未咲の喜ぶ顔の方が見たいし。

「新ネタいっきまーす！」
「せーの……」
「「幽体離脱～！」」
「「「「「ぉー！」」」」」

ただ、家に帰ったとても未咲との会話を禁止されているわけだから未咲に喜んでもらう方法を考えとかないとな……

「そしてそして！」
「幽体離脱、か～ら～の～？」
「「……多重影分身の術だってばよ！」」
「「「「「ぎゃーー！？」」」」」

なかなか盛り上がってるな……今なら北京ダックもタラバも大トロも気付かれずに確保できそうだ。
右見て……よし。
左見て……よし。
一応上下も……よし。

「タラバ、ゲットだ……ぜ？」

俺がタラバに向けて伸ばした箸が弾かれた。
……どういうことだ……？
まぁいいか。とりあえず北京ダックを、

ぱしん！

「なんだと！？　じゃあ大トロ、」

箸を伸ばした瞬間、視界の端に高速の何かが見えた。
甘いな……二度も見れば十分だ！

「と見せかけて北京ダックぅ！！」
「あっ！」
「ふふふ、北京ダック、ゲットだぜ！」

ふ……つい熱くなってしまったな。
俺の左手のタッパーには北京ダックが十枚分。もちろん薄餅（バオビン）……あの肉を包む餃子の皮みたいな奴、それに野菜とソースも確保している。
……未咲への手土産その一完成だな。
次は、

「大トロ……と見せかけたフェイント！　というのは嘘でやっぱり大トロゲットぉ！」
「あぁ！？　タネ君ズルい！」

うん。
大トロも普段は手が出せないから未咲も喜んでくれるはずだな。
さーて次は……

「タラバ……がない！？」

おかしい、さっきまでは少なくとも十杯分の脚があったはずなのに皿すらない……

「うーん、うまうま……タネ君、タラバ蟹って美味しいんだねぇ」

もちろん犯人はさっきから俺の妨害をしている……ウェルミ。

「というかウェルミ、主役のお前が一発芸見てやらないと可哀想だろ……」
「え……っと、だってタネ君いないとつまんないし、こっちの方が楽しそうだったし……」
「冷たいなー」

あいつらだってウェルミに楽しんでもらおうと……いや、勝手に楽しんでるような気もするな。

「まぁ、楽しければいいか」
「そだよ♪　そだ！　タネ君、これ美味しかったよ！」
「ほー……未咲に持って帰ってやろう」

「そ、そうじゃなくて……こうなったら……」

何をぼそぼそ呟いてるんだ……

まぁ、俺もぼちぼち食べてはいるけど家に帰ってからのシチューが本番だからな……あんまり食べすぎると後で後悔することになる。

「タネ君……あ、あーん！」

「ん？　ウェルミ、なにやってるんだ？」

気付けばウェルミが箸で器用にバッテラをつまみ、俺の方にさしだしていた。

というか、そろそろこの料理についてツッコミを入れてもいいよな？

……絶対に二万円で用意できる料理じゃねぇぞ！

「……タネ君のばか」

「いてっ」

なぜかウェルミに蹴られた。

……俺なにもしてないよな？

「いやー！　お二人さんあっついねぇー！」

「おわっ！？　いきなり何すんだコラ」

後ろからバチーンと俺の背中を叩いた輩を睨む……ってやっぱり賢太か。

あんまり調子に乗ると……そのなんちゃってイケメンフェイス歪ませるぞ？

「たねぇ！　お前って奴はぁ……うぇ……未咲様というものがあり

ながらぁ……うっぷ」
「え、なに？　お前酔ってんの？」
「おーぅ……酔いは酔いでも十六人の双子にぐるぐる回されてだなぁ……ぉえ」

いや、完全に酒で酔ってるだろこいつ。
草野たちが八セットなんてうるさくてやってられないぞ。
てか賢太の中では完全に未咲は様付けで呼ぶことで固定されたのか？
……まぁ、ちゃんよりかはマシだけど。

「だいたいお前はぁ……女みたいな顔しやがってー。俺の初恋をかほげっ！」
「気色悪いこと言うな！　あれはお互いに黒歴史としてそっと封印しただろ！」

って、しまった！
ついとはいえ酔っぱらいにボディーブローなんて……！

「いい、拳持ってるじゃねぇか……」
「吐くなよ？　絶対に吐くなよ！？」
「……それって、前、フリ……か？」

前フリじゃねー！

「うっ……！」
「と、トイレいってこーい！」
「あ、アイルビーバック……！」

そのまま賢太は口を押さえながら出ていった……危ないとこ

ろだった。
楽しい歓迎会が俺と賢太のせいであわや惨劇の夜だ。
賢太の位置的にあいつがバックトゥザフューチャーした先は未咲への手土産だったから助かった……俺も、賢太も。
あのままバックトゥザフューチャーしてたら賢太のイケメンもどきがイケメンになるまで殴るところだった……

「えっ！？　そ、それ、本当……？」

ん、今のはウェルミ？
なんだ、俺と賢太が話してた間に石破に連れていかれてたのか。
悪戯っぽい表情の石破に比べてウェルミの顔には少しの怯えが見てとれるが……

「なんの話してるんだ？」
「た、タネ君！　私の座ってる席が呪われてるって本当なの！？」
「あぁ、あれか」

……確かにあの席はずっと訳ありということで使用を自粛していたみたいだが呪われているかというとそんな気配はない。察知力が俺より優れている未咲ですら何も感じないんだから呪われているということはないはずだ。
ただ、座った生徒が貧血を起こしたりしたことは実際に何度かある。そんなこんなで証拠もないから俺と未咲は偶然とか思い込みとかの影響で体調を崩しているのだろうという結論を出した。

「まぁ、そういう意味では曰く付きではあるよなぁ」

もしかしたら祓魔師どころか悪魔にすら判別できない力が働いているのかもな……

「それこそ本当の幽霊とか……さ」
「そ、そそ、そういえば、あの椅子に座ると眠気が……！」
「そりゃただのサボり癖だろ……というかこの話、石破は前に調べてたよな？」

前にも誰か倒れて、その時に石破がいろいろ走り回っていたような……

「あれったまだ一年生の頃だったのによく覚えてんねー。ほら、確かデブリの隣の山田君の神隠しの上映が始まった頃だよ」
「あー……ののしってそんな長い題名だったけか？　まぁ、あの頃は未咲がいなかったからな」

ののし――もとい隣の山田君の神隠しは世界中から大絶賛された日本を代表するアニメ映画だ。個人的に山崎駿はそろそろ人間国宝になるんじゃないかと思ってる。

「未咲ちゃん関係無いじゃん」

石破が半目でツッコミを入れてきた。
……未咲がいない間は
特に学校で集中することがなかったし、周りのことも自然に頭に入ってきてたしな。
それでも普段は未咲の下校時間に合わせて迎えに行っていたけど
……授業が終わる前から。

「そっか……それでひなりんどうだったの？　なにか分かったの？」
「もっちろん！　と言いたいところだけど空振りでねー。結局、その椅子に座ってたのは三代か四代前の生徒会役員の女の子……あれ、

風紀委員だっけな？　それで、ちょうど今くらいとの時期……つまり体育祭の直前の打ち合わせの帰りに暴走していた乗用車に撥ねられたらしいってことしか、ね」

……やっぱり未咲と調べた以上のことは分からなかったか。俺があの席の隣だって知った未咲が慌てて調べ出したんだよな。あの時の心配そうな未咲の顔……可愛かったなぁ。

そのうえ最初から危険がなかったことは分かっていたことを未咲に伝えたら顔を真っ赤にして……未咲はいつまでたっても素直でいい妹だ。

「じゃ、じゃあその女の子が自分の席を奪われないように椅子に座った人たちを次々と呪い殺して……？」

「ウェルミちゃん……それ以上は言っちゃダメだよ？」

「ひぇぇ！」

……いや、誰も死んでないから。

からかう石破もだが額面通りに信じるウェルミもウェルミだよな……いや、幽霊を信じる信じないって話じゃなくて。

「ま、その席に関して言えばデタラメ、」

「「ぎゃーーーーーー！！！！！」」

「！？」

「あー……ったく。亮の奴、騒いだら起こられること分かってんのかな」

今のは賢太と……阿久津の声か？

石破が阿久津の声を聞き間違えるとも思えないし、二人が廊下で

合流してもおかしくない……それにしても、ふざけてたにしては真に迫っていたような……
調べた方がいいかもしれないが……どうやら俺たち三人以外に悲鳴に気付いた奴もいないみたいだし少し様子を見よう。

「亮も赤西君もなに騒いでるんだか……」
「ひなりんと阿久津くんは幼馴染なんだっけ？」
「腐れ縁だけどねー。昔から拓也も入れた三人で遊んでてさー」
「ふーん……どっちが好きなの？　ほらほら、おねーさんに聞かせてよ♪」
「うぇ！？　いや、私は別にそんな……」

……嫌な予感がするのは俺だけか？
石破とウェルミもすぐにガールズトークに移ってしまった。
まぁ、直前に呪いがどうこう話してたから過敏になってるだけかもな。
とりあえずこのフォアグラソテーを食ってみよう。

「どうせ、」

がたぁん！

「「出たーーーー！！！！！」」
「っ！？　……げほっげほっ！」
「花氏！　幽霊！　幽霊でたよ！！」

ちょ、阿久津、おま、落ちつ、

「胤！　マジだ！　ありゃあ酔っぱらいの幻覚なんかじゃ決してない！　あ、こら、お前聞いてんのか？　おい！」

賢太、お前もいい加減、

「た、タネ君！　ゆ、幽霊が出るなんて平気なのっ！？」

「って、俺を揺さぶるなぁ！」

俺に掴みかかっていた三人の輪から強引に抜け出す……まずい、食べたものがカムバックしそうだぞ。

それにしても幽霊ねぇ。

「タネ君！　早くお祓いしてよ！　タネ君祓もがぁ！」

「ウェルミ、お祓いは生徒会長じゃなくて坊さんとかの仕事だぞ？酔ってんのか？」

「むぐむぐむぐ～！」

まったく……学校で祓魔師とか言わないでくれ。頭がおかしい奴だと思われるじゃなキか。よくて厨二病扱いだ。

日本では「うっ……腕が……静まれ……！」とか言うキャラだと思われたら社会的な意味で死亡確定なんだぞ。

「ウェルミ、分かったか？」

「……花氏、ハナちゃんの顔真っ青だぞ？」

「……」

「げっ！」

口塞いだつもりが鼻も塞いでたのか……ウェルミ、悪かった。お前の犠牲は無駄にしない！　俺はお前の屍を越えて往くぞ！

……何て冗談は別にして、

「幽霊は置いとくにしても不審者の可能性もあるしなぁ。ちょっと

見回りいってくるかな」
「お、おい胤！　そんな女みたいに細い体じゃ危ないぞ……！」
「じゃあ賢太も来い」
「だが断る！」

……なら最初からなにも言うなよなー。それにひょろいとか言うな。幽霊相手に腕力なんて関係無いんだよ！
あれ……そもそも不審者だって思ったのは俺じゃないか！？

「ということで賢太も来い」
「やだって！」

どうしても行きたくないのかウェルミの影に隠れる賢太。なんちゃってイケメンここに極まれり、だな。
そこまで怖がることないだろ。

「あの、それなら私がタネ君と行こっか……？」
「いや、そりゃだめだ」
「はぅ……」

がっくりと項垂れるウェルミ。初めて会った頃のお姉さん風な雰囲気はどこに消えた。
というか一応は主賓のウェルミが見回りとかおかしいだろ。

「よし、賢太よく聞け？　あ、ウェルミは石破と他行ってろ」
「な、なんだよ……？」
「さっきまで石破たちと話してたんだが、あの呪いの席には可愛い女の子が座ってたらしい」
「そ、それが？」

可愛いというフレーズに反応したのか賢太が顔をあげた。
「本当に幽霊なら、そのすげー可愛い女の子に会えるんだぞ？」
「ほ、本当に不審者だったら……」
「季節外れだけど学校に忍び込むような奴は変質者に違いない。学校は暖かいし露出狂かもな。ただで裸が見れるなら……いや、もしかしたらその先も……」
「よーし、出発！　胤！　俺について来い！」
単純すぎだろ……だいたい俺は変質者が女だとは言ってないぞ？
最初に女の子の話をしておけば騙せる……というか勝手に勘違いしないかとは思ったが……賢太、いくらなんでもバカすぎだろ……
「胤、なにやってんだよー！　生ＡＶが逃げるだろ！」
「発想が飛躍しすぎだ……」
小学生でも――いや、小学生はＡＶなんて知らないとは思うが――そんな勘違いはしないぞ。
とにかく本当に超常関係だったときのために準備はするか。
俺にとっては幽霊なんかも当たり前な存在だから超常ってのも変な感じするけどな。
「っと……これでいいか」
なるべく重くてしっかりしたものと思っていたが残念ながらモンキーレンチしか机に入っていなかった。
なんでそんなものが机に入っているのかと言えば……なんでだ？
「お、おい胤……お前って女顔のくせに嗜虐嗜好あったのか……？
女の子には優しくしてあげないといけないんだぞ？」

「……はぁ。お前ももう少し常識的な会話ができるようになればモテるのにな」

この流れなら普通に考えて不審者対策だろ。

どういう思考を展開したらこれでＳＭプレイ的な発想に繋がるんだよ……

「ほら、行くぞ賢太」

「お、おう」

廊下に出れば既に大分暗い。

本格的に秋めいてきて日が短いというのもあるが昨今の病的な省エネブームが原因だろう。廊下の非常灯以外に光を放つものは何もない。

割り箸を使わない、ビニール袋を使わない……そんなことで温暖化抑制に尽力していると思っているんだから日本人ってのもなかなかお気楽だよな。

日本のエコってのが一番原始的だって笑われているのを知ってるのか？

「原子力にも問題あるから推すわけでもないけど火力で主電力を賄うってのもな」

ちょうど俺が考えていたことと似たようなことを賢太が呟いた。

案外本当に同じことを考えていたのかもしれない。

「発電所か？」

「この前テレビで見たけど日本では地熱発電が効率的なんだとよ。物を燃やさないからクリーンで温暖化にもいいんだとさ」

「ほー、そういやメタンハイドなんちゃらってのはどうなったんだ

ろうな？」

何年か前にお昼の番組で見かけたぞ。

「あー、日本の地下にエネルギーが埋まってるって騒いでたやつか。どうなってるかは知らんけど」

こうすると家庭の二酸化炭素排出量が何割減ります！　なんて番組はあるくせに火力発電主体の現状をどうにかしようって動きは全くないんだよな。

「あげく石油王に脅されてるから火力発電をやめられないなんて都市伝説も出来上がるくらいだしな」

「あれって嘘なのか？」

「いや、知らんけど」

確かに石油製品がこれだけ溢れてるんだから火力発電が止まったとしても日本はそれなりの石油消費国……石油王が脅しをかけるほどでもないかもな。車だって多いし。

「発電形態が変わればエコもそこまで騒がれなくなって、結果この廊下も明るくなるってのに……」

「……あー、結局そこに繋がるのか」

「な、胤、お前今俺のことバカにしてるだろ？」

いや別に普段からは想像できない真面目な話を始めたからどうしたのかと思えば、いかにも幽霊が出そうな廊下の暗さをエコのせいにして気を紛らせようとしてたのかなんてことは考えてないぞ？

平たく言えばビビってやがるなんて思ってないな。全然思ってない。

「あ、てめっ！　やっぱバカにしてんだろ！」
「してないって。ただ怖いなら教室戻ってもいいぞ？」
「あの……」

とにかく賢太をからかう。
ある意味こんなのも日常茶飯事だ。たいていは途中で未咲に怒られてやめてしまうが。
お兄ちゃんはこんな似非イケメンにやられるほど弱っちくないぞ！

「このっ……やんのかてめぇ！」
「おー、いいぞ？　このレンチで緩んだボルト閉め直してやんよ」
「あの……！」
「うっせえ邪魔すんな！」
「うわ、女の子にまで声を荒げるとか賢太くんこわーい！」

俺たちを止めようとした女生徒に怒鳴った賢太を笑う。賢太も咄嗟だったらしく恥ずかしさからか顔が真っ青だ。
……真っ青？

「お、おおお、女の子がぁ！！？」
「いや、大袈裟すぎだろ」

……それにさっきからいたよな？

「で、出たーーー！？」
「おい賢太！？　……まったく失礼な」

予想以上にチキンだった悪友にため息を漏らしてから俺たちのすぐ側にいた女生徒を見た。

誰かと思えば一時間ほど前に見たばっかの顔だ。
確か風紀委員の……
「えーと……」
「……桐野舞子です。お友達、どうしたのでしょう？」
「あー、幽霊の話してたからな。桐野さんに驚いたんだろう」
俺は随分前から気付いていたが賢太はそうでもなかったみたいだ。桐野さんは小柄だし何かの影にでもなってたのかもな。
「あら……私の存在感が薄いせいで怖い思いをさせてしまったのですね……」
ズーンと沈んだような声で桐野さんが呟く。おい賢太、女の子には優しくしてあげないといけないんじゃないのか？
……あとでからかうネタができたな。
「それはそうとこんな時間まで何してるんだ？　会議が終わってから随分時間が経ってるし部活もとっくに終わってる時間だぞ？」
「えっいえっ！　……その、えっと……」
「ははーん……生徒会長には言えないようなことだな？　恋人でも待ってたんだな？」
もう人も少ないのに学校にいるってことはもしかしてうちのクラスの誰かか！？
あのクラスには誰一人として恋人がいる男はいないと思っていたが……
「まぁ、心配すんな。俺は生徒会長らしからぬ生徒会長って評判だからな」

別に不純異性交遊云々で告げ口したりはしない。そもそも禁止する校則もないし、ウェルミが俺たちの家に同居してることを認めていることからもわかる通り、普通科自体が結構柔軟な教育方針だしな。

他の科は知らん。

「えとそうではなくて、友達を探しているんです」

「ん？　友達？」

「はい……」

む、少し赤面？

なるほど、友達以上恋人未満ってあれだな。それなら俺の無粋な手出しは無用だろう。早々に退散するとしようかね。

「ま、あんまり遅くならないうちに帰るんだぞ。じゃ、またな」

「はい。おやすみなさい」

うーん、丁寧な子だなぁ……こういうのを大和撫子っていうのか？こんな子に好かれる男ってどういうタイプなんだろうな。案外、不良だったりして。

でも未咲はともかくウェルミと弓緋之にももう少しお淑やかになってほしいよな。特別な関係でもないのにいきなり抱きついてきたりってのはよくない。もちろん未咲はいつでもウェルカムだけどな。

……と、そうだ。

どうせさっきの賢太の怯えようからして賢太と阿久津は桐野さんを幽霊だと思って逃げてきたんだろうけど……一応不審者が校内にいるかもしれないってことは伝えておくか。

「そうだ、桐野さん」

振り返ったら桐野さんの影も形もなくなっていた。
なんだ、もう行っちゃったのか。
今から追いかけて桐野さんのラブコメを邪魔したくないし教室に戻って賢太を笑いものにしてやろう。

第七話

「はぁ……ごちそうさまでした」

……一人での夕食は味気ない。美味しく感じられないから実際に食べている量も少ないし……

いつもは兄さんが、最近になってからはウェルミも一緒だからうるさいと感じるくらいだったけれど今はその騒々しさが恋しいような気がする。

……ううん、そんな気がするだけ！

ウェルミはともかくあんな妹のことしか見てない人なんていてもいなくても同じ……というより私に実害があるかもしれない！

「なんて、ね……バカみたい」

別に兄さんが私のことを大事にするのは私を女として見ているからじゃない。そんなことは何年も前から知っている。

そして私も兄さんを男性として意識したりなんかしてない……でも、家族としての兄さんは優しいしカッコよく思えるときもあるから……尊敬はしてる。細身なのが少し頼りなく感じられるけど本当はそんなこともない。

だから自慢の兄、くらいは言ってあげてもいいのかもしれない。

うん、私と兄さんはそういう意味でお互いに好き合ってる……本当に。

幼い頃は周りから流石に異常だと思われて距離を置いて育てられたことがあるくらいにはベタベタしてたかも。

もちろん血も繋がってるんだから恋愛感情なんかあるわけないけどね。兄さんが私を大切に思ってくれているから私にとっても兄さんが大切な存在になっているってだけ……

「それに……」

……兄さんがああなのは私のせい。

兄さんは忘れてしまっているけど、私と兄さんの違いがはっきり現れた六年前の”あの日”に私が言ってしまった一言が今でも兄さんを縛っている。そのせいで兄さんはいまだに誰かと恋愛関係を築いたこともないし、そもそもそういうものに興味を示さない。

ううん、兄さんがそうならないように私が仕向けている……兄さんを守るために。

この前のウェルミとの約束だってそその一環だし、普段から母さんと父さんが家にいないのもそう。もし兄さんが矛盾に気付いたら苦しむことになってしまうから……

「本当は、私が我慢できればいいんだけど……」

むしろ、そうするべきなのは理解してるつもり。それでも、あの一言こそが私の本心だから……それを翻すのは嫌だし、なにより……怖い。

あの言葉をなかったことにしてしまったら今の日常が壊れてしまう可能性もあるから……だから、兄さんがウェルミを押し倒しているように見えた時は心臓が止まるかと思った。

……私はズルいのかもしれない。

兄さんに妹離れしなさいと言っているくせに、本当にそれを邪魔しているのは私……兄離れできない私。

……ココにも謝るべきかもね。

「我ながら本当にダメだな……」

七歳の誕生日に兄さんがプレゼントしてくれた一抱えもあるぬい

ぐるみ――モッピーキャットを抱きしめてソファに横になる。
名前のとおりにモップの先みたいな毛に包まれた猫はフワフワもこもことしていて抱き心地がいい。
あの時、兄さんはこの子と私が似てるなんて言ってたけど……美人だと言われるくらいの容姿だってことは分かっているけど私はこんなに可愛くはないし、こんなに純真そうな瞳もしていないと思う。
「……家でぬいぐるみを抱きしめてるなんて、佐本君が見たら幻滅しちゃうかもね」
学校での私は冷たく見えるみたいだから……
にゃー、なんて鳴き真似をしながら人形劇よろしくモッピーキャットを動かしてみる。僕はモッピーキャットのダンディ！　……なんてね。
「ふふ……どの顔でダンディなんて言ってるのよ、えいっ！」
もさもさのモップな毛の隙間から僅かに見えるおでこのハートマークを指でつつく。
……佐本君が私に気があるのも知っているけど気付かないフリをしてる。別に彼のことは好きでもなんでもないけど告白されてもいないのに好きじゃないと伝えるのも変な気がするし……なにより無駄に注目を集めるのは嫌い。それに、兄さんに心配かけたくない。
昔、私にしつこく交際を迫ってくる人がいたけど兄さんが撃退してくれて……それから兄さんが私の送迎をしてくれたり気を配るようになった。去年の兄さんの出席率が低い理由は私のため。
……そういう色々に大して申し訳ないと思いつつ、それでも兄さんに頼りきりな私はやっぱりズルい。
「でも……やっぱり付き合うなら兄さん以上の人じゃないとね」

これをココに言ったら変な目をされた後に笑われたけど、男の人としても私に頼られたいんだと思うから……それならやっぱり兄さん以上に魅力があって頼りがいのある人じゃないとダメだと思う。
ただでさえ私は兄さんに寄りかかりっぱなしだから。
でも……もしそんな人がいるなら早く私の前に現れてほしいな。

「そうなれば……これ以上兄さんを縛ることもなくなるし……」

ココやウェルミさんが兄さんにアタックするのも笑って見ていられるようになるかもしれない。
ウェルミさんは本気なのかまだ分からないけど……少なくともココは兄さんを……うーん、でも前に泊まりに行ったときは兄さんがいないのに本気で否定してたし、もしかしたらココもココで気持ちに気付いてないのかもしれない。
何で生徒会役員に立候補したのって聞いても本心から首をひねられちゃったし。
でも、それならそれで……矛盾するけどまだ本気になってほしくないかも。

「もう少し、兄さんに甘えてたいってのも妹としては当然あるわけで……」

外では絶対にこんなこと言えないけど、やっぱりもうしばらくは私の兄さんでいてほしい……私もなかなか学ばない駄目人間だなぁ。

プルルルル

兄さん……かな？
いや、会話禁止っていうのを気にしてるだろうからそれはないよ

ね。

「はい、もしもし……」

やっぱり違う人。

……兄さん、律儀に守るつもりなのかな？

「はい……いえ、母は出張で海外に。え、兄さんですか？」

……母の不在を知って兄さんに、ということは祓魔師関係なのかもしれない。

母さんは実力も認められていて一流扱いだから、その母さんに頼むような仕事が祓魔師としてまだ新人の兄さんに回されるなんてことはないはずだけど……でも、最下級だとしても兄さんは実力があるから、それを知ってる人なら代わりに頼むということもあるのかも。

それでも兄さんを過大評価している可能性もあるからこういう世界は難しい。

私は……祓魔師ですらないから戦うこと以外で役に立てないけど。

「え……！？」

ドクン、と血流が激しくなった気がする。

あり得ないと分かっていても聞き間違いであることを願ってつい問い返してしまった。

「……天使、ですか……」

……当然、その単語を私が聞き間違えるはずもない。それだけで心臓が握り潰されているかと錯覚してしまうほどの圧迫感。

半分、悪い夢を見ているような心地で受け答えをし、受話器をおいた。

「どうしよう……兄さんに伝えないと……！」

■□■

時刻は午後九時。

遠いところから通学してる生徒もいるし……終電とかも考えるとそろそろ解散したほうがいいだろうな。

家が遠い奴だけ早く帰ればいいってのも一理あるが……なんとなく不公平な気がするから全員が同じ時間に解散する方が後腐れもないだろう。自分が帰ったあとに面白いことがあったりするのは悔しいしな。

「胤、俺達……阿久津たちと渡辺あたりで二次会行くけどハナちゃんと来ないか？　というかハナちゃん来ないか？」

「え、えっと……」

「阿久津たちはわかるけど渡辺まで！？　……組み合わせには興味あるがパス。未咲が家で待ってるからな。お前らも早く帰れよ？」

いかにも俺はおまけというような誘い方だ。そんなんで行くはずが……ということで、ちょっと興味深そうにしていたウェルミが変なことを言い出さないうちに断った。ウェルミより未咲の方が優先順位は高いしな。別行動をするにしてもウェルミがまたま学校から家までの道を覚えてないし。

それにしても阿久津・石破・宇都美・健太に渡辺か……何が起きるのか全く想像つかない……十中八九めんどくさいことになるだろうこと以外はな。

とにかく事件起こしたりすることだけは勘弁な。俺が生徒会長に

なって間もないのに仲のいいクラスメイトの非行なんかがバレたらやめさせられかねない。やめさせられなくても怖い風紀委員長に嫌味を言われそうだ。

「ま、そういうことでじゃあな」
「おーう。またなー。送り狼になるなよ？」
「俺の家に行くんだし襲っても“送り”狼ではないだろ」
「そ、それって結局襲うの……？　でもタネ君なら……」

誰が襲うか！
……いや、逢った初日から未遂はあったけど……あの場合の被害者は俺だよな？
正直途中からの記憶がぽっかり欠落しているのが気になるが思い出そうとすると頭が痛くなるから……ただ、未咲にお兄ちゃんと呼ばれたことだけは魂に刻み込まれてるから問題はないな。

「ふー！　楽しかったね！」
「まぁ、楽しさだけを求めるなら六組入って正解だったな」
「へぇ、やっぱり六組が一番楽しいクラスなんだ」
「……今年はそれとなーく一組から順に学力順だからな」

大きな隔たりはないが、それでも比べてみるとクラスの数字がより小さいクラスの方が平均点が高い。
一組と比べて六組の平均点は大体十点くらいの差がある。もちろん低い方に。
……全く同じ授業を受けているんだから生徒の学力自体に差があるのは明白だ。

「えぇ！？　わ、私そんなおつむ弱い子じゃ、」
「結局初日から授業を丸々寝て過ごしたやつが言っていいことじゃ

ない」
「いや、だから椅子に座ると眠くなるんだってばー！」
「……授業が終わった瞬間に目が覚めるくせに椅子に責任転嫁するな」

何が恐ろしいって終業ベルが鳴る前に授業が終わったり、逆に伸びたりすることもあるのにウェルミは完全に授業終わりに合わせて目を覚ます。
そこまでいくともう逆に仕方ないなと思ってしまうくらいだ。
教師陣も引っ越しその他諸々で疲れているんだろうとか気を遣って起こさないし。

「好きに眠っていられるのも今日明日までだぞ」
「ホントなのに～。あ、ほら、あの椅子は呪われてるから仕方ないんじゃない！？」
「そりゃ都合のいい呪いだ。だいたい呪いで眠らされてるやつがあんなに可愛らしい寝顔なわけがないだろうが」
「可愛らしっ！？　って、女の子の寝顔見るのは反則だよ！」

ウェルミが飛び付いてきて俺の肩をがくがく揺する。
……褒めてやったのにどうして怒られないといけないんだ。
というか反則も何もウェルミがこっち向いて寝るのがいけないんじゃないのか？　あれだ。例えるならカンニングするなよーといいつつ黒板に答えを書いていく教師みたいな……そんな奴はいないか。

「で、でもそれなら授業中に寝ちゃうのも悪くないのかな……？」
「悪いだろ……というかそのセリフはもう確実に自分の意思で眠ってることを認めてるよな？」
「あ、あぅ、そんなことはー……なんて誤魔化せないよね？」

ウェルミも笑って誤魔化すのにも限界があると思ったのかしょんぼりとしてうなだれてる……なぜか耳と尻尾を垂らしている犬を幻視してしまった。

「ふむ……」

そう考えてみるとウェルミは犬っぽいかもな。人懐っこいし素直だしちょこちょこ動き回るし、何より感情を身体全部で表現するところとかそっくりな気がしてきた。

そうなると未咲は……プライドが高く人を寄せ付けない……ように見せかけて気を許した相手には甘えたりする猫だな。

犬派か猫派かと言われれば同じくらいどっちも好きだと答えるがウェルミ派か未咲派かと聞かれれば未咲派だ！

でもウェルミもスタイルいいし子作り一歩手前までいってしまった負い目があるからここはウェルミにも気を使って……

「……俺は何を言ってるんだ？」

「ん？　どうしたの？」

「いや、犬派か猫派か……とかそんな感じのことだよ」

「んー、私は犬の方が好きかな？　わんわん♪」

うん、やっぱりウェルミは犬だな。

〜〜♪〜〜♪〜〜〜〜♪

「タネ君、鳴ってるよ？　……あ、彼女だなぁ？」

「いないし」

にやにや笑うウェルミを手で追い払う。まったく、彼女なんかいたらウェルミを家に泊めたりしないだろっての。それに俺には未咲

がいるし。
あれ？　そういえば歓迎会の前にサイレントモードにしてなかったか？
……ということは未咲か。未咲からだけは音が鳴るようにしてるからな。電源を切らない限りは音で必ず気付けるように備えているんだ。

「もしもし？　……あ」

これってもしかして未咲の悪戯（ハニートラップ）じゃないのか！？
会話したから罰則追加♪　なんて……いや、うん。未咲はそこまで悪戯っ子じゃないな。
むしろ未咲のハニートラップになら喜んで引っかかりにいくからたまには悪戯を仕掛けてほしいなぁ。

「未咲？」

というか電話に出たはいいけど何も聞こえない……もしかして何かがあって助けを呼ぼうとしたけど電話が繋がったところで力尽きたとか！？
いや、もしかしたら強盗に襲われてて電話をかけたけど犯人グループに気付かれたとかか！？
くそっ、どうすればいいんだ！？
……少し、冷静になろう。興奮していたら助けられるものも助けられなくなる。
まず、電話の向こうから物音は聞こえない。だから未咲が乱暴されているということはないはずだ。暴力にせよ性的なことにせよもの音を消すことはできない未咲に性的な暴力だと！？

「よーし、薄汚い強盗（ドブネズミ）ども。耳の穴かっぽじってよーく聞けよ？

もしお前らが未咲に触れようものなら手先足先の関節をひとつずつ鋸で切り落としてお前ら自身に食わせてやるから覚悟しろよ？」
『兄さん、心配してくれるのは嬉しいけどそれは少し過激すぎじゃない……？』

強盗犯に向けて放ったメッセージなのに電話の向こうからは未咲の応えがあった。しかし向こうからはかすかに未咲の吐息が聞こえる。電話越しに聞こえる程息を荒くする行為なんて……

「未咲！？　大丈夫なのか！？　何があった！？　ちゃんと服は着てるか！？　無理矢理何かをされたりしてないよな？！」
『に、兄さんの想像の中で私は何をされたの……？　いや、えっと、兄さん、良く聞いてね？』
「あ、あぁ……」

も、もしかして強盗とかそういうのは全部勘違いか？
でもその上で未咲が深刻そうな態度で俺に……いや、待て。電話＋性的な行為の可能性＋重要な報告＝ＮＴＲ（ねとられ）！？
いや、俺と未咲は兄妹だから厳密には違うが……まさか行為の最中に俺に電話をかけるとかそういうプレイを強要されているんじゃ……ということは！

「佐本、お前は俺を怒らせたぞ……？　関節を一つずつなんて生ぬるい。毛根ひとつひとつを熱したかぎ針でえぐり取って、」
『だから兄さんの中で私はどうなってんの！？　……というか強盗も佐本君もいないよ。　それで、えっと……余計なことは考えないでいいからね？』
「……分かった」

強盗も佐本君もいないなら安心だ。

佐本君は俺の中でぶっ〇したい後輩ナンバーワンに堂々と座っているからな。
電話の向こうでは未咲が深呼吸を一つ……あぁ、これを俺は荒い吐息だと勘違いしたんだな。

『えと……こ、校則違反の罰なんだから学校の外ではそれって全く関係ないはずだから別に私と会話しても罰則の上乗せとかそういうのはないからというか家で兄妹二人きりなのに会話が無いとかご近所さんに変な目で見られちゃうからお兄ちゃんは気にしなくていいんだからね！』
「お、おう……本当かっ！？」

というか未咲、大分子供っぽくなってるから落ち着きなさい。
いや……お兄ちゃんとしてはこれからもお兄ちゃんと呼んでほしいけどな？

『そ、そんない嬉しい……？』
「あぁ嬉しいな！　パーティで出た豪華な料理とか持って帰ってやるからいい子にして待ってるんだぞ！　あと戸締りはしっかりと、知らない人は家に入れちゃだめだし電話でだって会話しちゃだめだからな！」
『あ、そうだ、本題は別に……』
「え？」

お、お兄ちゃんと会話したくて電話かけてきたんじゃないのか！？　そ、そんな……お兄ちゃんショックだぞ！
……いや、というか結構真面目な話みたいだ。
これだけ長いこと……といってもしっかりとした記憶があるのは六年前からだから普通よりは短いけど、それでも中の良い兄妹をやっていれば自然と相手の雰囲気は分かる。

俺と未咲なら……たった一度の呼吸だけで相手の気持ちはなんとなく理解できる。

「未咲、怖い夢でも見たか？」
『違う……』
「母さんに何かあったとか？」
『それも、平気……』
「じゃあ、」

どうしてそんなに不安そうに……いや、怯えているんだ？

『天使が――』
「え？」

ドサッ

「あ、ちょっと待て、なんか変な音が……ウェルミ！？」

音の方向を振り返るとウェルミがうつ伏せに倒れていた。
息は荒いが意識は無い……受け身も満足にとれなかったのか手には軽い擦り傷ができている。
本来、ただの物質との接触では怪我をしない悪魔が転んだだけで血を流すというのは弱っている証拠……それは祓魔師が相手の体力を見分ける一つの指標だ。
全ての物体の設計図とでも言うべきアストラル体が弱ることで表出し、傷ついてしまうのだとか……なんてことを冷静に考えてる場合じゃない！
確かに未咲からの電話がかかってきてから急におとなしくなったし……いや、それも今はいい。
とにかく、どうしてウェルミはここまで弱ってる！？

『に、兄さんウェルミさんがどうかしたの！？』
「知らん。急に倒れた……ずいぶん弱ってるみたいだ！」
『うそ……もう、なの？』

……未咲はなにか知っているみたいだけど悠長に聞いてる暇はない。
とにかくウェルミを早く家に運んでやらないと……

「未咲！　一旦切るぞ！　話は家についてからだ！」
『に、兄さ――』

未咲の返事を待たずに切る。
今は急いだ方がいい。アストラル体が露出するほどの消耗だと最悪の場合ウェルミが消滅するかもしれない。
厳密には肉体を持たない悪魔は物質界とも言うべきこの世界で体調を崩すとその影響が顕著に表れる。大気の第五元素（エーテル）の濃度が薄いためアストラル体を護る霊体の修復が困難だからだ。
せめてウェルミが物質化（マテリアライズ）さえしていれば……いや、そもそも霊体が弱ること自体が稀なんだ。わざわざ不便な肉体を纏おうと考えるわけがないか。

「とにかく専門家に連絡を……」

どう頑張ったって人間が悪魔のことを完全に理解することはできない。
それなら、悪魔に診てもらえばいい話だ。
ウェルミを背負いあげてから、切ったばかりの携帯を片手で操作する。
今まで一度も使ったことのない短縮ナンバーを入力し通話ボタン

を押す。
三度の味気ないコール音の後、待ち望んだ人物が電話に出た。
『やぁ、胤君……この番号から連絡してくるってことは緊急のお困りごとかな？』
「至急……家に来てくれ」

電話の向こうから低い男声が応える。
声の持ち主は優れた医療技術を持っていたとされる悪魔ブエルの子孫を自称するラナト・ブエル・エナクルだ。こちら側の世界には珍しい悪魔の医者。
ブエルというのが貴族としてミドルネームなのか優れた医療魔法の使い手ということを示す称号なのかは定かではないが、腕は確かだ。
人間用のクリニックも経営しているため、世間的に見たら普通じゃない我が家の主治医でもある。特にお袋の怪我は魔法が原因だったりするから事情を知る悪魔の医者というのは都合がいい。

『君が急かすってことは……未咲ちゃんが体調を崩したのかい？』
「いや、居候の悪魔が倒れた。転んだ拍子にか分からないけど血も流してる……これってアストラル体が露出しかけてるってことなんだよな？」
『直接診断しないとわからないけど……それは確かに急を要するかもね……分かった。急いでいくよ』
「頼む……」

ラナトは親父の友人でもあるため両親が留守にしているときは実質的に俺と未咲の保護者になってもらっている。
そういう付き合いがあったおかげで家の位置を説明しなくてよかったのは、時間に余裕がない局面では不幸中の幸いだったかもしれ

ない。

「ウェルミ、しっかりしろよ……！」

背中のウェルミに声をかけるが当然返事はない。

さっきまで元気だったのにどうしていきなり……いや、原因の究明はラナトに任せよう。俺はウェルミに負担をかけないようにしつつ家まで急げばいい。

「なんでこういうときに限ってタクシーいないんだよ」

ウェルミもだが未咲までなにかに怯えてたってのに……

嫌な予感ともどかしさを振り払うように足に力を込めて走る。

今は急ぐことしかできない。

第八話

「はぁ、はぁ……着いたぞ」

家の外壁に手をついて少し息を整える。
さすがに徒歩で二十分以上かかる距離を人一人抱えて全力疾走するのはツラい。
いくら悪魔が霊体だといっても重さはあるからな……現象としては幽霊に取り憑かれると体が重く感じるのと同じだ。ただし、おなじ霊体でも霞のような幽霊と違って悪魔のそれは密度が高いから余計に重く感じる。
ラナトは……電話してから時間も経っていないしもう少し時間がかかるかもな。
玄関の扉を開けて座り込む。脚がつりそうだ。

「兄さん走ってきたの！？」
「未咲……ウェルミを運んでくれ」
「う、うん……よいしょ」

気絶しているウェルミを片手で抱き上げて未咲がリビングへと去っていく。
……本当に、あの細腕のどこにそんな力があるのか不思議だ。
戻ってきた未咲にラナトのことを聞いたがやはりまだ来ていないらしい。

「……あ、来たみたい」

がちゃり

「やぁ、おまたせ。悪魔の診察なんて久しぶりだから準備に手間取ってしまったよ」
「リビングだ。早く診てやってくれ」
未咲の呟きに少し遅れたタイミングでラナトが扉を開いて現れた。くたびれた白衣に伸び放題でボサボサの黒髪……それでもチョイワル風のオーラがあるのは悪魔ゆえか。長身なのも相まって海外の人気俳優だと言われても信じられる。
「それじゃ、失礼するよ」
普段はここに来るときはダルそうな態度でいるラナトも今回は仕事だからか真面目な顔でさっさと革靴を脱いで家に上がり込んでくる。ラナトも親父と契約しているため、わざんざ俺たちが扉を開けなくても家に入ってこれる。契約とは言っても普段の二人はただの酒飲み仲間だが。
ラナトがリビングへと歩いていったのを後目に俺は玄関に寝転がった。
しばらくはここで休もう……ウェルミも女だし診察中に同席しない方がいいだろう。ラナトがなにかしようとしても未咲が止めるだろうし……なにより今日は疲れた……
「まさか歓迎会をいきなり開くことになるとは思わなかったからな……」
朝から生徒会の仕事をしていた上に、ウェルミが隣で堂々と眠るもんだから俺が寝るわけにもいかず……基本的に睡眠不足の俺には随分辛かった。風紀委員との会議も実がなかった割になかなか疲れたしな。
……それにしても、ウェルミはどうして弱っていたんだ？

まだこちら側の世界に来てから一週間も経っていないんだから、元いた世界との違いが体調に影響を与えたりしてるのかもしれないけど……そんな素振りは全然なかったよな。肉体を持たない悪魔だから不調は精神的なものが原因だろうし、それなら無理をしていれば思い当たる節があってもおかしくないはずなんだが……
可能性としてはこちらに来る前からなにかしらの異常を抱えていたか、それとも特大の魔法を連続して使ったか……

「いや、それならウェルミ自身が気がつくはずか……」

ウェルミが自覚症状のようなものを感じていたとして……それならウェルミのことをサポートすることは契約ないように含まれているんだし、なにか一言くらいは言ってくれるだろう。
それをしなかったということはウェルミにとっても想定外のことだった……？

「……ん？」

今日、ウェルミにおかしな素振りがなかったかを考えていたら視界に影が差した。
見上げてみればラナトがウェルミを見ている間に着替えたのか黒い…ニーハイソックスっていうのか？　それにつつまれた未咲の足があった。カモシカみたいな足だな……
もう少し視界を上にあげるとスカート……ではなくホットパンツが目に入った。
うんうん。
スカート姿を外の男なんかに見せるわけがないからな。

「に、兄さん、ラナトさんが来てって……」

少しじっと見すぎたのか未咲が頬を染めて一歩分離れた。
もちろん下心はない……単純に愛でていただけだ。未咲もそれが分かってるから怒らないんだと思いたい。

「ウェルミはどうだった？」

床に手をついて立ち上がりつつラナトがどういう診断をしたのかを尋ねる。

「それが……詳しいことは分からないって。でも難しい顔してたから……」
「……危ない状況かもしれないってことか」
「……多分」

人間が肉体を失うと死んでしまうように悪魔も霊体を失うとやはり死んでしまう。死にかけの子供すら笑いながら診療するあのラナトが難しい顔をするというなら……今のウェルミはそうなってもおかしくないのかもしれない。

「とにかく、行ってみよう」
「うん……」

最悪の場合に対する覚悟も決めてリビングまで移動する。緊張のせいか自然と早足になる。

「ラナト、ウェルミの様子は、」
「ど、どうしてこの子は悪魔なのにパンツはいてぐふぇぁ！」
「えと……兄さん、私間違ってないよね？」

……うん。

ラナトを蹴り飛ばした姿勢のまま不安そうに固まる未咲の頭を撫でてあげた。
未咲がやらなければ俺が殺っているところだった。
「未咲ちゃんのスキンシップは相変わらず激しおふっ！？」
「に、兄さん！？」
……っは！？
なんかイラっとしてつい殴ってしまった。でも後悔はしていない。
「いやいや、というかスカートを捲ったのも八割強くらいはあくまでも治療の一環で……あ、悪魔とかけてるわけじゃないよ？」
いたた、と頬をさするイケメン……といあか患者のスカートの内側を覗く医者がどこにいる。それに残りの二割はなんだよ。
「ぱ、パンツをはくと外から第五元素（エーテル）を取り込むことか難しくなって、」
「少なくとも二人、パンツをはいてて健康な悪魔を知ってるぞ？」
「あ、あー……うん、それでこの子なんだけどやっぱり霊体が消えかかってる状態だ！」
シリアスな顔つきでラナトが言った。
こいつ……強引に話を元に戻しやがった！
……いや、そもそもふざけていていいような状況でもなかったんだが。
「それで？　ウェルミに何が起きてる？」
「うん、単純に霊体を構成してる第五元素（エーテル）がなんらかの理由で消失してる」

「それで……あの、ウェルミさんは助かるんですか？」
「第五元素（エーテル）ってのは僕達悪魔や君達人間の魔力と同じものだから供給してあげるのはそう難しくないし、一応僕が供給しておいた……ただ……」

ラナトの言葉に俺も未咲も安堵の息を吐く。
どうやらウェルミが死ぬことはなさそうだが……

「まだこちら側に来て一週間も経っていないのに霊素欠乏……ああ、この子の症状なんだけど、そんなの聞いたことがないんだ。だから原因が明らかにならない場合、魔界に送り還すしかないかもしれない」
「原因……か」

ラナトが分からないのに俺が分かるとは思えないがウェルミの身の回りで起きたことを考えてみる。
とはいえウェルミとは初登校だった今日を含めたほとんどの時間を俺か未咲が共有していた。唯一ウェルミが一人きりになったのは俺と未咲が会議をしていた時だけ……その時も数分で六組の連中と合流したわけだから……

「まったく分からん……外的な要因はなかったように思えるけど……」
「そうなると先天的な疾患の可能性も出てくるね……」
「あの……私は外的な要因の可能性が高いと思います……」
「他の悪魔の仕業とかかな？」

外的な要因とはようするに魔法による攻撃だ。
でもここのところ他の悪魔とか妖怪とかそういう気配はなかったんじゃないのか？

俺は近くまで寄らないと分からないけど未咲の場合はそれなりの範囲内の人外の存在を関知できる……その未咲が俺に何も言っていないということは外敵はいないはずなんだが……

「それが……兄さんが帰ってくる前に未来視（さきよみ）と名乗る方から電話があって……天使が私たちの前に現れると……ウェルミさんのもそれが……」

「それがなにかしらの影響を与えていると未咲ちゃんは思っているわけだ？」

「はい……」

天使……？

まさか……いや、でもこの話の流れだと天使ってのはまず間違いなくあの天使のはずだ……

もちろん悪魔がいるのだから天使がいてもおかしくはない。

ただ、悪魔が人間の敵と誤解されているのだから天使が人間にとって善なる存在だと言い切ることはできない。

それどころか天使は間違いなく人間にとっての敵だ。だから各国政府でも天使の存在を認めているものは少ない。

「どうして……天使が……」

「まぁ、確かに天使が関わってくるなら外的な要因ってのもあり得るかな」

天使も悪魔と同じく霊体で構成されている。つまり天使も魔法を使え、それで誰かを攻撃することもある。ウェルミの霊体が急激に損なわれたのも魔法による攻撃と考えるとそう不自然なことでもなくなる。

そして一番厄介な点が悪魔と違って話の通じる相手ではないということだ。契約を守らないだけでなく天使自身の倫理観によってのみ

行動するため、時に魔法によって大災害を引き起こすこともある。大災害を起こさなかったとしても天使によって人生を狂わされる人間は数多くいることだろう。

「でも魔法の気配なんて全くなかったぞ？　俺でもそれくらいは分かる」

「そうだね。でも……呪紋なら？」

「……なるほど」

……呪紋は設置型の魔法とでもいえばいいだろうか。あらかじめ決められた紋様を刻んでおき条件が達成されている間だけ一定の効果を発揮する。準備に手間がかかる上、効果も制限されていて不便だが……確かに魔法のように大きな異変が生まれることは少ない。感覚が鋭敏な者でもなかなか気付けないだろう。

「でも、そんなに都合よくウェルミを狙えるか？」

呪紋は直接刻み込まなければいけないという特徴に加え条件のクリアも必要になる……それこそ道ばたに掘った落とし穴と一緒で、狙った相手を確実に攻撃するということは難しい。呪紋の攻撃的側面があまり認められないのもそのためだろう。

大抵は気温のコントロールだったり微風を起こしたりといった生活に役立つちょっとした仕掛けのようなものだ。

「あ……兄さん、椅子！」

「椅子？」

「ほら、ウェルミさんの席の……じゃあウェルミさんが狙われたわけじゃなくて、最初から無差別で……？」

「そういえば胤君たちの学校では何度か不可解な失神騒ぎが起きていたね？」

「ということは……もしかして？」

ウェルミの席のどこかに呪紋を……？

それなら確かに呪紋の効果によっては座った生徒が失神するのも不思議じゃない。

……その場合の効果は間違いなく、

「「「第五元素（エーテル・コレクト）の蒐集……」」」

第五元素（エーテル）は悪魔にとっては生命力であるとともに魔法という攻撃手段を支えるもの。蒐集は呪紋としては割とポピュラーなものだ。

ただ、本来は人が気付けないほど少量の第五元素（エーテル）を集める呪紋を多量に仕掛けるのが普通で、人間が一瞬失神し悪魔が一日で死にかけるような物騒なものではない。

それは人道的ではないというだけでなく、あの学校の席のように曰くが付いてしまって逆に蒐集効率が悪くなるからだ。

だとすると仕掛けたのは若い悪魔、もしくは……

「やっぱり天使……なのか？」

「十中八九そうだろうね」

「言い切れるのか？」

「未来視（かのじょ）たちは嘘を言わないからね。彼女たちが言った言葉は必ず真実になる。このタイミングで君達が天使と関わるというならこれに関係してのことだろう」

未来視（さきよみ）というのがどういう存在かは把握しきれていないが呪紋を使ったのは天使らしい。いや、使ったとするならだが……無差別な呪紋の使い方は確かに天使のもののように思える。ただ、もちろん呪紋が使われたというのが確定したわけじゃない。呪紋自体を見つけるまで早合点は禁物だろう。

仮にウェルミの失神が先天的なものだったとして、この件とは無関係に天使と関わることになったとき思い込みは邪魔……下手をすると命取りになるかもしれない。

「……一度、調べる必要があるな」
「兄さん、私も付いてくよ」
「ん、ん～……いや、しかし……」

いくら未咲が戦えると言っても危険は危険だ……俺が未咲のことを守りきれるかどうかってのも怪しいし。
もし本当に天使が出てきた場合、まともな準備が出来ていない現状では自分のことで手一杯だ。もちろん命をかけて守るつもりはあるが……下手をすると二人とも斃される可能性もある。

「……連れていってあげれば？　死にかけても僕が治すからさ」
「そうですよね！　ほら、兄さん！」
「いや、治るからって話じゃ……それに乙女の柔肌に傷がついたらだな……」
「僕は傷痕を残すような治療はしないよ？」
「いや、だからそういう問題じゃ、」
「とにかく！　私も行くからね！」

……仕方ないか。
可愛い妹にすがりつかれて拒否できる兄なんていない！

「それで、天使のことはどうするんだい？　あぁ、いいや。僕のことは巻き込まないでね。患者がいるから僕が怪我するわけにはいかないしね」

……ラナトには何十人という患者がいる。それを軽んじるのを医者

としてのラナトに要求することはできない。
それにラナトが死んだら俺達を治してもらえないしな。

「……まぁ、それは仕方ないか」
「とりあえず、この悪魔の子はしばらく様子を見よう。君たちには呪紋の当てがあるみたいだし……この家にいても霊素欠乏が起きるようだったらまた呼んでよ」
「……今日は助かった。ありがとう」
「……じゃあ僕は病院に戻るよ」

診療が終わった途端にラナトはいつも通り気が抜けた炭酸のようになり、そのままふらふらっとリビングから出ていった。
医者として働いているときのラナトは男の俺から見ても魅力的なんだけどその仕事スイッチがオフになって瞬間に頼りなくなるんだよな。親父の話では俺と未咲もラナトに救われたらしいが……あの情けない姿を知っていると感謝しにくい。

「ウェルミさん……助かるってね」
「そうだな。まぁ、一安心か」

未咲と短く言葉を交わすとまた部屋が静かになる。
……一応の治療は無事に終わったとはいえウェルミが健康になるとは言い切れない上に天使の問題もある。雰囲気が暗くなるのも仕方ない。
もちろんこの空気はどうにかしたいが……

「そういえば兄さん、その手提げ袋なに？　そんなの持ってってたっけ？」
「え？　あ、あー！」

未咲に指摘されるまで綺麗さっぱり忘れてた。というかウェルミが倒れたときに置いてかなかった俺偉い。
未咲が中学の時に家庭科のクラスで作ってくれた手提げ袋に入っているのは今日の歓迎会での戦利品だ。

「北京ダック、大トロ握り、たらば蟹、サラダにティラミス……未咲、どうせ夕食はあんまり食べてないんだろ？」
「いや、そんなことは……」
くぅぅぅ……
「あぅ……」

可愛らしいお腹の鳴き声とほぼ同時に未咲の頬に朱が差した。
やっぱり一口二口食べてごちそうさましたんだな……季節の変わり目なんだから栄養を十分に摂らなかったら病気になるぞ。
……いや、もしかしたら体調を崩したから食欲がないのか！？

「未咲、ちょっと頭をこっちに……」
「ん？　うん……」

こつんと額同士をあてて熱がないかを確認してみる。目の前には金髪と同じでやはり普通より色素の薄い鳶色の光彩がある。俺はごく普通の黒髪黒目だったから昔は少し羨ましかった。
昔のことを思い出していても仕方がないから気を取り直して未咲のぱっちりとした二重や長い睫毛、大きな瞳を見ながら額に意識を集中させる。
……若干未咲の体温の方が低いか？
よくわからないと言うことは同じくらいなのかもしれない。

「兄さんの目は真っ暗だね……飲み込まれそう」
「……普通、真っ黒って言わないか？」
「そうかな？　そうだね……でも、黒より黒い気がしたから」
未咲がくすくすと控えめ笑ったから安心して頭を話した。
体調を崩してるときの未咲はなかなか笑わない。意識してのことではないみたいだけど俺が未咲の笑顔を見てないなと感じたときは大抵それなりの病気になっている。
最後は去年の冬ごろに未咲がインフルエンザにかかったときか。

「相変わらず一人での飯は嫌か？」
「そんなことは……あるけど。でも我慢するよ？」
「それならしっかり食べること。まぁ、嬉しいけどな」
「えと……シチュー暖め直すね？」
「ん？　ああ、頼む」

……ふむ。
なんか今日の未咲はいつもより素直で大人しいな。いや、もちろんいつも素直で大人しいけど……殴ったり蹴ったりは愛情表現だからノーカウントだ。
やっぱり不安なんだろうな。
ウェルミのことも天使のことも。未咲は周りを大切にする性格だから。

「兄さんはシチュー熱いのが好きなんだよね」
「もう冷え込んできたからなー」
「そうだね……あ、マフラーとか欲しい？」
「作ってくれるのか？」
少し冗談めかして尋ねてみる。

でも確かに冬服も用意し始めないとな。今年は特に冷え込むみたいだし上着を買い足すのもいいかもしれない。
未咲にもなにか買ってあげるかな。

「や……えと……兄さんが欲しければね……れ、練習代わり作ったマフラーあげるけど」
「まじで！？　もらう！　超貰う！」
「……ピンクのハート柄だよ？」

なに……？
普通に考えれば、男がハート柄のマフラー……しかも恋人じゃなくて妹からのプレゼント。これは少し世間体が不味い。
……いや、しかし未咲の手作りは捨てがたい！
もらうだけもらって使わないなんて選択肢はあり得ないし……世間の評価と妹……俺はどっちを選べば！？

「ふふっ……」
「未咲？」
「嘘だよ。本当は兄さんも使えるように真っ白。黒にしようかとも思ったけどそれだと兄さんが全身真っ黒の不審者になっちゃうからね。あとで部屋に持ってくね」

……つまり、もらえるということか！
うん？
というか練習代わりにマフラーを作ったって言ってたよな？
ということは練習の他に本命があるわけで、しかもそれはマフラーより手が込んでいるもの……セーターか？
そして未咲の性格的に練習のものを本命を渡す相手にあげるとは思えない。となると未咲が渡したい相手は俺じゃなくてそいつ……
自惚れるわけじゃないが未咲と一番仲がいいのは俺……その俺より

も優先するということは……恋人！？

「じゃあ兄さん、いただきます」

「未咲、その前に大事な話がある……」

「えと……天使のこと……？」

「そんなことはどうでもいい！　一度、紹介しなさい」

俺が、未咲を守れる男かどうかを見極めてやる。頼りないと思ったときは……未咲には悪いが再起不能にするしかない。

きっと、未咲は分かってくれるはずだ。

「えと……何の話？」

「俺に、隠すのか……？　そこまでして守りたいのか？」

「え？　だから、え？」

本気で分からないと言うような顔を作る未咲。そんな演技には騙されないぞ！

……いや、少し冷静に考えよう。

未咲だって俺に認められない男と付き合えるとは思っていないはずだ。だから本当に好きなら隠さないで話すはず……ということは未咲が気にしているのは相手の男じゃなくて俺か？

……未咲の彼氏は俺がショックを受けるような人物なのか？

だとすると……

ふと、未咲を呼び捨てにしたちょっとしたイケメンを思い出した。

「佐本ぉ……やはり殺しておくべきだったか」

「え、なんで佐本君？」

「俺の妹に手を出すとはいい度胸だ……二度と未咲に興味を持たないように毛根一本ずつ潰して出家させてやる……」

親父の知り合いに阿闍梨（あざり）にまでなった厳しい坊さんがいるからな……性根を叩き直してもらおう。
思えば最初からピリピリとした嫌な感覚はあったんだ。
もっと早くに行動を起こしていればよかったか。

「兄さん、絶対に誤解してるけど……まぁいいか」
「よし、それじゃいただきます」
「いただきます」

佐本の奴……いったいどうしてくれようか。
ウェルミのことと天使のことが解決したら真っ先に叩き潰してやろう……俺は執念深いから今のうちに覚悟しておけよ？

「ん、美味しく出来てる♪」

未咲がシチューを一口掬って口に入れるとたちまちその顔が綻んだ。
ん、今になって味を再確認するって……

「未咲、まだ食べてすらいなかったのか？」
「食べた……でも一人だと味が感じられないというか美味しくないというか……」
「寂しがり屋め」
「だって、一人で食べることなんて月に一度もないし……うぅ」

言われてみれば確かにそうだな。
もう俺も未咲も高校生なんだから夜に予定が入ったりなんてことがあってもおかしくないはずなんだけどな。
俺に予定が入るときは未咲も弓緋之と食べたりしてるが……そういえば未咲の予定で俺が一人になったことは一度もないかもしれない。
まぁ、未咲は本当に独りになることが嫌いみたいだからな。それこ

そ、夕食が喉を通らなくなってしまうくらいに。

「兄さん。ウェルミさんとか天使のことはどうするの？」

「……まずはウェルミの席の周辺を調べてウェルミが倒れた原因になりそうなものがないか探す。なければ天使のことを政府に報告……あれば俺たちの手で決着をつけるために戦うしかないな」

「政府には任せられないの？」

花氏が管理祓魔師じゃなければ助力を請うことに抵抗はなかったんだけどな……

天使と管理地域の間に関わりが認められた場合、その天使は管理者だけの問題になる。天使によって刻まれた呪紋はその関わりの証拠としては十分すぎる。

そしてその上で手に負えないと判断して助力を頼んでしまうと管理能力不足とされてしまう……分かりやすくいえば他の祓魔師などからナメられるということだ。場合によっては土地の分割や最悪没収までありうる。

……だから呪紋が見つかってしまったら俺たちの手で戦うしかない。

「ま、見つからなければいいんだけどな」

「でも、見つからないと……ウェルミさんに先天的な問題があったことに……」

あぁ、そうか……そうなるとウェルミが帰ることになるのか。

呪紋があってもなくても悪いことだということにはかわりない……

なんというか、希望が持てない状況ってのが一番救いがないな。

「どっちに転んでも不幸だ……」

「私は、呪紋が見つかった方がいいな……天使と戦うことになったとしたも」

「ま、天使も案外弱いかもしれないしな」

会ったこともないんだ。
慎重になりすぎても怯えすぎる必要はないだろ。
最後に天使が現れたのは六年前のヨーロッパ。その時は約百人が行方不明になったとか言われているが……そもそも公式発表されるものでもないし尾ひれが付いてもおかしくないだろ。
……まぁ、公式発表されていないということは犠牲者は百人じゃ済まなかったという可能性も……あるけど。
うわ、それを俺と未咲で倒せとか無理ゲーだろ！

「調べにいくのはいつ？」
「いつ天使が現れるかは分かってないんだし準備時間を長くとるためにもなるべく早い方がいいな。明日なら土曜日だから生徒も少ないだろうし早速行くか。善は急げ、だ」
「……うん。分かった」

……まぁ、未咲は楽観的に考えられないか。
六年前、未咲はお袋とヨーロッパにいた……というよりお袋も天使討伐に協力したって話だし、実際に天使の猛威を目にしただろう未咲が怯えるのも仕方ないな。
俯いている未咲の頭に軽く手を置く。

「兄さん……？」
「未咲、お兄ちゃんが守ってやるからな」
「……無茶はしないで」

それは聞けないな。
俺は未咲を守るためならなんだってするつもりだし。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9916u/

小悪魔えくそしすた！

2011年10月8日17時40分発行